從七位陸軍中尉大庭君題辭

備後碌々庵居士編纂

明治新體詩歌選

YEIRI.

偶評

明治二十一年十一月第二版

津田氏發行

黄廿微文

茅ノ家ノ版

明治新體詩歌選

偶評 YEIKI

從七位陸軍中尉大庭君題辭
備後碌々庵居士編纂

明治二十一年
十一月第二版
津田氏發行

家

光枝

獨

行

等續生題

行軍ノ圖

緒言

一本書ハ當時人ノ專ラ頌謠欣和スル玉句錦章「但シ居士ノ鈍作ヲ除ク」ノ新体詩ヲ編輯セシモノナリ

一本書ハ最モ兵士ノ奬勵楠氏ノ頌賛及ビ勸學教訓ニ係ル篇ヲ數多トス蓋シ本書編輯ノ由テ基スル所ナレハナリ

一本書編輯方急需匆々ノ際ナレバ固ヨリ之レカ評語モ亦匆々ノ罪ヲ免カレズ又作者ノ住号ヲ漫然ニ歸スル者數首アリ讀者幸ニ併セテ諒セヨ焉

明治廿年三月下浣

碌々庵居士識

新体詩歌選目次

西詩和譯　坪井正五郎　一
外交の歌　屈山居士　一
春夏秋冬の詩　尚今居士　二
進軍歌　姓不詳　四
行軍歌　姓不詳　五
ロングフェルロー氏兒童の歌　尚今居士　六
寄隱君子　碌々庵居士　九
自由の歌　小室屈山　一
チャールス、キングスレー氏の悲歌　山仙士　二十五
擬代悲白歌翁詩　北溟釣史　二十八

楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌　姓不詳　三十一
高僧ウルゼーの詩　山仙士　三十三
シャール、ドレアン氏春の詩　尚今居士　三十五
女子を勵ます詩　一山居士　三十七
童子の死を悼む詩　外賢居士　三十八
ロングフェルロー氏玉の緒の歌　巽軒居士　四十
少年某氏を悼む　碌々庵居士　四十三
松の緑　天外處士　四十六
カムプベル氏英國海軍の詩　尚今居士　五十一
グレー氏墳上感懷の詩　尚今居士　五十三
軍旗の歌　立見尚文　六十五

抜刀隊の詩　丶山仙史六十八
勸學の歌　尙今居士七十二
客中秋夜　訥々庵居士七十六
小楠公を詠ぜるの詩　姓不詳七十七
新体詩林發行を祝す　一山居士八十
明治丙戌除夜　碌々庵居士八十三
女子に告ぐ　明日香小史八十七
薄命の歌　扇岳逸士九十
ブルウムフヰールド氏兵士歸鄉の詩　丶山仙士九十三
日本魂　落花居士九十八
テニソン氏船將の詩　尙今居士百二

一月元旦　蘭竹居士百七
兵士の歌　大庭景一百十
西鄉追慕の歌　海舟散人百十三
新年小學生徒に寄す　安藤新太郎百十五
テニソン氏輕騎隊進擊の詩　丶山居士百十七
詠史　姓不詳百廿一
日本魂　尙今居士百廿三
秋の夕　百合香女史百廿六
復古の歌　姓不詳百廿八
凱戰の歌　大庭景陽百三十
軍歌　姓不詳百卅二

鎌倉の大佛に詣て、感あり　尙今居士　百卅五
無題　故久坂義助　百卅九
世渡りの歌　小川健治郎　百四十一
隱子を詠して學童に寄す　碌々庵居士　百四十五
寒村夜歸　小川健治郎　百四十八
社會學の原理に題す　、山居士　百五十
春の眺め　子有樵夫　百五十九
送學友歸鄉詩　大竹美馬　百六十
朝貌の花に寄せて學童を奬勵する　小川健次郎　百六十四
四時　大和田建樹　百六十六
刺客を詠ぜるの詩　八門奇者　百六十八

シエークスピール氏ヘンリー第四世中の一段　、山居士　百七十二
シエークスピール氏ハムレット中の一段　尙今居士　百七十六
ホーヘンリンデン戰爭ノ詩　山陰樵夫　百七十九
櫻の歌　大庭景陽　百八十三
童子勸學辭　落花居士　百八十五
小楠公決死の歌　橋本謙作　百八十八
新案いろは歌　一山居士　百九十一
護國の歌　姓不詳　百九十四
題秋（西詩和譯）　望月秋太郎　百九十八

湘南秋信　鈴木券太郎　二百
案山子　碌々庵居士　二百二
春の花　龍溪學人　二百五
熊本籠城の歌　大庭景陽　二百六
夏夜卽事　小川健治郎　二百九
見燭蛾有感　犬山居士　二百十一
ロングフェールロー氏人生の詩　丶山仙史　二百十三
日本刀の歌　大庭景陽　二百十七
人の東都に行を送る　楢山居士　二百十九
題明治乙酉攝河州二洪水　一山居士　二百二十
計七十三首
新体詩歌選目次終

新體詩歌選

西備　碌々庵居士　編輯

西詩和譯

坪井正五郎

息の出入とからだの血　しかのみならず宜心地
清きたましひくれ命　時計のめぐり早くたち
遽に變る針の位置　歳ハすぐとも業とさち
なきは則ち無能無智　多く考へ氣をたもち
よき働きを爲せる後　長しと言ハんこの命ち

古今薄命の人多くハ無能無智に因る勉むべきハ學にこそ習ふべきハ藝にこそ

井上巽軒曰、押ニ韻自ニ在、可レ喜ヲ、又々曰ク、學者日ニ誦レ之ヲ以テ勗ヘ、則チ其ノ進ニ歩可ニ期ノ而峻ッ也ナリ、

外交の歌

屈山居士

西に英吉利北に魯西亞
外表に結ぶ條約も
萬國公法ありとても
強弱肉を爭ふは
嗚呼同胞の兄弟よ
盡せやはげめ諸共に

我邦今日の
同胞兄弟よ
當さに服膺
して外侮を
禦ぐへし

春夏秋冬の詩

春は物事よろこばし
庭の櫻や桃のはな
野邊の雲雀いと高く

春色可嬉

油斷な爲せぞ國の人
心の底は測かられぞ
いざ事あらば腕力の
覺悟の前のとなるぞ
御國に生れし甲斐あらば
丹心込めてつくすべし

尙今居士

吹く風とても暖かし
よゝ美しく見ゆるかな
雲井遙かに舞ひて鳴く

夏の木草の葉も茂り
夕暮かけて飛ぶ蟲は
人は我家を立出でゝ

秋容宛然

秋の尾花にをみなへし
晴れて雲なき青空に
されど何處も同じこと

百日紅も咲きにけり
集り來る軒のきは
猶涼むらんさよふけて

桔梗の花も開くべし
照らす月影明かに
寂しく見ゆる家の外

冬は雪霜いと深く
なさん爲とて爐火に
風は吹入る戸のあはい

冷ゆる手足を暖かく
近く團居をする時に
外の方見れば銀世界

砕々庵居士曰 僅々數十語能極二四時可レ思之景一兼
運轉離合之妙一

進軍歌

姓名不詳

丸弾は霰と空に飛び
雷擬ふ砲聲に
我魂の緒も打絶ん
進むに猛き武士ハ
屍ハ野邊に曝すとも
櫻と匂ふ九段坂
祭り納にし諸靈は
寇なす戎夷盡るまで

劍は野邊の電か
吹き來る風も腥く
今はの時ぞ勇壯しく
嚇嗚ふとは何のその
名は后の代に馥郁しく
空に聳ゆる靖國の
是れ大丈夫の龜鑑ぞへ
假令や火の中水のそこ

此の歌を讀む者誰れか凜然粟を生せざらん此の歌を讀む者誰れか慨然節に死せざらん

何爲厭はん敷島の
堅きに堅硬き金剛の
人皆なゐて羨慕す
放郷人に品格高く

倭魂飽くまでも
石より光輝灼々ハ
青白なせる桐の章
錦繡を飾る心氣よさ

進めや〳〵
諸共に王の
所愾に敵す
るハ是ぞ倭
人の心にて
古今の國に
冠絶し皇統
今に連綿と
輝やく朝日
の勢を千代

行軍歌

姓不詳

我が日本の國体ハ
神の御國と稱へきて
遠き戎夷が國までも
射や草葉の露計り
類少なき緒環の
守るハ誰の職務ぞや

故き神代の頃よりも
五百海坂隔てたる
光輝く旭子の
傳り受けし例しだに
靈きぬ皇帝の功績を
誠實ある身は甘美にも

八千代迄保つへし噫同胞の兄弟よ

五の訓戒銘肝して
多聚かる人の其中に
厚き仁恵は駿河なる
伊勢の海すら尚は淺し
寇なす戎夷有もせば
討ち夷けて大君の
東のあひだも忘るなよ
醜み御楯と拔擢れて
不二の高峯も尚は低く
其の皇に若しや又
躊躇ふ事いなきものを
御心慰め奉れ人

ロングフェロー氏兒童の詩　尚今居士

此一編老境に在りて幼界の事を述ぶ幼界の樂老境の憂宛然眞に迫る而ふして人情の均しき

來れわらへべ傍はらに
我等が多年苦みて
忽ち解けし露はどの
汝が遊ぶさま見れば
なはとけざりし疑い
曇りも胸に止まらす

洋の東西に差別なし誰れか一概に洋人を稱して無情殘忍の人と云うや諸君チットは此等の詩を看て人情の異ならざるとを悟れげし

汝が遊びたはるゝを
窓打あけて日に向ひ
清く流るゝ川水に
見るは恰も東なる
さへづる鳥の聲聞て
臨むが如き心地せり

流るゝ水も鳥の音も
心の如くゆたかなり
かなしき秋も過去りて
照らすあさひも汝等の
されど我等の心中い
寒き雪霜ふりにけり

童はべ無くば世の中い
童はべ無くば我々い
前を望むもうばたまの
如何に苦しきとならん
後ふり向も憂さばかり
闇の夜中に異ならぬ

知らずや茂る森の木ゝ
清き空氣や日の光り
善き汁液を造り成し

知れよ閉けき氣候をば
幹にはあらで軟かき
森を此世にたとふれば

此歌尤も妙にして開説極めて巧なり

來れ童はべかたはらに
花に戯れ啼く鳥も
如何なる事ぞ告るやを

思慮を巡らし智を竭し
我等が書ける文とても
汝が面の樂しさに

人の賞する詩や歌ゝ
完全無虧の汝等に
汝ゝ生ける詩歌なり

寄隱君子

珍奇からぬ事ながら
深山に睡る虎を見よ
伏屋に籠る牛を見よ

格言

十八

いと美しき綠り葉に
其作用を施して
幹と枝とを養ふを

うけて早くも感ずるゝ
綠の葉にてありぬるを
葉は童はべに比ぶべし

のどけき天を吹く風も
汝が清きこゝろにゝ
我耳近くさゝやけよ

我等が成せる業とても
汝が樣のかゝゆさに
比ぶるとのあるべきや

世に數多くあるなれど
及ぶべき者あらぢかし
他は皆死にし言葉のみ

碌々庵居士

言はねばならぬそゝ何ぞ
鋭き爪ゝ搏んが爲め
鋭き角ゝ觸るゝ爲め

若しも利用を缺しなバ
斯る眞の道理に
去るに屹々寢もやらで
玉を心に持ちながら
朽るゝ人のつとめかや

今ゝ昔とかわり
智惠ある人ゝ敬ゝれ
況て明治の大君ゝ
既に布れし登庸の

二十

主宰の慈悲に悖らん
塵の曇りも無るべし
磨き立たる連城の
犂鋤とりて小山田に
哀れと云ふも愚なり

貧富貴賤の差別なく
博學人ゝ尊とまる
公平無私の御制体
芽出度規則あるぞかし

振へやふるへイザ振へ
振へやふるへイザ振へ
此國民を英佛の
是れぞ日本の心なり

自由の歌

天にゝ自由の鬼となり
自由よ自由、やよ自由
天地自然の約束ぞ
此世のあらん限りまで
いかにぞ仇に破るべき
月に村雲花に風

古今の通患

振て民の杖となり
振て國の基礎となり
上に臨して威を揚よ
是ぞ日本の心なり

小室屈山

地にゝ自由の人ならん
汝と我のその中は
千代も八千代も末かけて
二人が中のやくそくを
さわ去ながら世の中は
まゝにならぬゝ人の身ぞ

話せば長いとながら
その人民を自由にし
數多の人のうき苦勞
我權勢を張らんとて
企てたりしシーザルは
議員の中に殺されたり
民を奴隷になさんより
我の羅馬を愛するは
羅馬の民の望みなら
捨る命はいと易し
自由を壓制なさんとて

古し羅馬の國と聞く
共和の政治を立んため
それをも知らで慾のため
再び帝位に昇らんと
その親友の手にかゝり
その親友のいふことよ
寧ろセザルを殺さばや
親友よりも甚し
我身も茲に諸共に
佛蘭西國のルイス帝
種々に手段を廻せど

邪道はいかに正道に
民のいかりは火の如く
岩をも碎く勢ひに
黄金をかざす冠は
哀れ墓なくなりけるは
自業自得と言べけれ
同じ車の一ツ轍

コロンウエルが手に持ちし
天をも回らす計りにて
自由の基を立てたりさ
もと英國の民なれど

打ちかつことのなるべきぞ
又洪水の溢れ來て
いと長くも帝王の
頭斷機械の上に落ち
誰を怨みん壓制の
英吉利國の革命も
昨日の王は今日の賊
自由の旗の招きには

チヤールス王を誅戮し
北亞米利加の合衆國
其發端をたづぬれば

自由の人となりたさに
深山荊棘ゝまだ愚か
あを海原を打ち渡り
殖民なせし心根ゝ
然るに猶も英吉利の
暴君汚吏の壓制に
義兵を擧ぐると聞からに
死ぬる覺悟で七年の
遂に敵をバ追ひ拂ひ
ワシントンの名に負へる
國のはまれや勇ましゞ

自由の筆を以て自由の理を說き古來の虐主を臚列して國民の塗炭を述べ以て吾人に自由の須臾も欠ぐ可からざる事を知らしむ讀む者一場の話言となし漫に看過すること勿れ

故郷の名殘に氣を止めも
人のふみてしともなき
見も知りもせぬ亞米利加へ
いかにあゝれに思ふらめ
はだしの綱は離られも
詰り詰りて國の爲め
我後れじと親も子も
長の月日の攻め守り
目出度立てし獨立國
都と共に榮へゆく
嗚呼彼と云ひこれと云ひ

自由の爲にゝ昔より
又死にわかれするものを
土地にかわりゝあるなれど
人の自由といふものゝ
つとめよ勵め諸人よ
余此文をかきおゝる
眠りをさます鐘の音の
數多の人の生き別れ
我東洋の人ぢやとて
などか心に變るべき
天地自然の道なるぞ
臯屈の民と云るゝな
時しも春の夢枕
いともさやかに聞へける

碌々庵居士曰、以二自由二字一說去說來、斡旋有レ力、非四有二大活眼一者三不レ能レ言也、

チヤールス、キングスレー氏の悲歌、山仙士

無常を告ぐる入相の鐘の音するたそがれに

離別の情寫し來りて妙人をして漣然たらしむ

三人の漁父ハ帆を上げて
走らす船ハ進めども
心の中ハ皆同じ
沖に向ひて行めるる
まうけハ殘く子澤山
洲に打掛る浪音の
かせがにやならぬ男の身

三人の漁父の妻三人
鐘もほのかに聞ゆれば
火を挑げんと立寄りて

入る日をさして西方に
妻子の爲に引かさるゝ
父の出船を眺めつゝ
童子ハ外に餘念なし
雨の降る日も風の夜も
最とすさまじき其時も
袖のひぬのハ女の身

日も西山に入相の
共に籠りし燈臺の
つまめる心の夫思ひ

窓の戸開けて眺むれば
空打過るむら雲ハ
暴風ハ如何に吹けばとて
洲に打掛る浪音ハ
かせがにやならぬ男の身

朝日かゞやく砂磯に
殘るハ三つの屍ねぞ
歸らぬ旅に門出して
髪振り乱し取りすがり
目もあてられぬ風情なり

雷雨やら暴風やら
色黑〳〵と物すごし
水かさハ如何に增せばとて
如何程すごく聞けばとて
袖のひぬのハ女子の身

潮引き去りて其跡ゑ
三人の漁父の妻三人
歸らぬ夫のなきがらに
消る計りに泣入て
かせがにやならぬ男の身

袖のひぬのゝ女子の身
一ト日も早く樂をせん
寄せ來る涙のくだけつゝ

擬代悲白頭翁詩五

其意の存する處其筆の健なる豈支那者流の論にあらんや

都のにしき桃櫻
無常の風にさそゝれて
木梢を去りてしほ〳〵と
此處ゝ何國そ名にしあふ
二八ばかりの乙女子が
露の命のはかなさを

北溟釣史

一ト日も早く世を去らば
屍の跡の砂磯に
鳴りたきや鳴れよゑゝ儘よ
色香めでたきその花も
名殘おしきにオサラバと
落ち行く先きゝ誰が家ぞ
墨田河原のかたほとり
飛び來る花に打ち向ひ
かこつもいとゞ哀れなり

今年の花も散ぬれば
顏の色香も失せけるか
逢ふてかこつゝ誰やらん
我身の上も同じこと
またこん春の初花に
思ひやるさへうたてやな

情を知らぬ仙人の
賤ゞ伏屋の薪なり
蒼海原になりさてふ
斧にふるれば深山木も
桑の園生も小山田も
ことさへ人の言ふぞかし

過ぎしむかしの曙に
草葉の露と消えいてゝ
花を賞たる古人ゝ
爺の小藤の稚兒が

今また落花にあいんとい

去年に咲にし其花い
かわり易きい人の上
今い何處に眠るらん

幼なかりし其日にい
樹の下陰に打ち群れて
天津乙女のうたひして
去るに一ト日いはかなくも

龍盛か

三十

頼み少なき浮世かな

今年も更にかわらねど
去年に花見しその人い
花のこなたに見ぬめり

春の蝴蝶のよねんなく
戯れあそぶ舞の袖
いとも楽しく暮しけり
病ひの床にふし柴の

もゆる思も消にいてゝ
秋の鹿の音月影も

幼なき時余もまた
うつろゐて行く世の習
あわれ翁になりにけり

春の初花若みどり
我身にとりて用いなし

花の顔月の眉
今い頭に霜おきて
あわれ汝もまた心せよ

哀憐の情想

眺めにながめつくゞと
舞ひつ謠ひつせし野邊を
それとも知らぬ鳥の音の
べし

杖にすがりて其むかし
たそがれ時に眺むれゞ
いとも哀れに聞ゆなり

楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌　姓　不　詳

肌の守りを取出し
下し給ひし綸旨なり
余ハ兎に角になるならバ
叡慮を悩し奉らんハ
去ハ去り乍ら正行よ
忠義の道は兼て知る
家名を汚すとなかれ
あハれみ扶助し隱家の
月の桂ハ漣や
旗を再び飜へし
叡慮を安んじ奉れ

建武の昔し正成は
是ハ一歳都攻の有しとき
之を汝に與ふなり
世ハ尊氏の世となりて
鏡にかけて見る如し
父の子ならバ流石にも
弓張月の影くらく
打洩されし浪党を
吉野の山の奥深く
流れも清き菊水の
敵を千里に追ひ退けて

嘗に正行其人への遺訓のみならず日月と共に國人たる者肝銘すべし

句々悲壯自ら歔欷其の數を知らぞ

嗚呼叡慮を安んじ奉れ

高僧ウルゼーの詩

おさらバさらバいざさらバ
榮譽に永く別るへし
利運の端の芽出しなバ
位に位ひ重なりて
愚な胸に思ふ樣
天にも登る龍なりと
冬やゝ深く置く霜の
根までを枯らす霜枯に
見るも愍れな有樣は

おさらバの數字何等の勇筆ぞ

山仙士

再び會ハぬ暇乞ひ
八の習ハ皆都て
八重咲きにはふ花盛り
榮曜榮華を極むれハ
運命強よく願かなひ
悦びいさむをろかさよ
情け用捨も荒野原
運極ハまりて身の墮落
我々今日の身の上ぞ

永の年月心なく
浮袋にてうか〳〵と
丈の立たざる淵に入り
こちらへをふせぎ張り裂けて
忠を盡して年寄れる
身の零落に涙川
浮世の虚飾や譽れ程
今に至りて我が胸に
廣き世界の其内で
此世を渡る男はど
願ふ所ハ其笑顔

名譽の海に浮べるハ
游ぐ童子に異ならぎ
飽まで強き我が意地も
勞れいでたる精神に
其の甲斐もなく今ハはや
水屑とこそハ成るべけれ
忌むべき物ハあらぎかし
初めて悟る所なり
王者の機嫌取りぐに
憐むべきハ無きぞかし
恐るゝ所ハ其不興

後人総て如斯

彼と是との氣がねして
軍するより尙は多し
遂に零落する時ハ
再び浮ぶ瀬ハあらず
碌々庵居士曰、字々悲壯、巧摸寫寵臣末路之眞境、身無才藝、徒恃君寵、以弄威福者、須足爲誡矣

憂き恐怖さの數々ハ
女子の機嫌取るに增す
天より落るルシファなり

シャール、ドレアン氏春の詩　尙今居士

春の景色のゝどけさを
いかで好まぬ人あらん
冬ハ物事さびしさも
春ハ心のをのづから
とけて樂み限りなし
雪もみぞれもふる雨も

人をなやますとぞなき

北風強く吹く冬い
雨もこはりていと寒く
爐火近く團居して
されど嵐も雪も歇む

曇りがちなる冬の空
されど春にもなりぬれい
光りのどけき天を見る
跡も殘らぞ消うせぬ

三十六

のどけき春の來る時い

野邊にい深雪木いつらい
障子ふすまを建回いし
ねぐらの鳥に異ならぞ
のどけき春の來る時い

日影もうすく晝くらし
喜ばしくも雲いれて
いぶせく降りし雪霜い
のどけき春の來る時い

冒頭の數句忽ち人をして奮發せしむ

女子を勵ます詩

勉めよ〳〵女子諸君
教の道も改まり
男尊女卑の風習も
諸君も此機を失いぞ

勉めよ進めよ女子諸君
取りも直さぞ國の母
其子の爲の幸不幸
亦皆母の教へより

一山居士

今い昔と異なりて
三從七去い地を拂ひ
既に大かた去りければ
勉めよ〳〵諸共に

諸君い人の母なれば
母の教のよしあしい
國の榮ふも衰ふも
勉めよ進めよ諸共に

進めよ學べよ女子諸君
教師ハ讀み書き算術や
人を教ふることならじ
皆なさゞるの罪なれバ

學べよ研けよ女子諸君
西洋男女の關係を
同權論さへ唱へける
慚る心のありもせば

童子の死を悼む詩

夏ハ過ぎけり初秋の
彼鳥部野ハ如何ならん
いと物凄き風ぞふく
友に離れてさまよふと

彼兒の友ハ多かるも
遊び戯れ樂むに
草生ひ出づる苔下に
呼びかへさんに術ハなく

嘆きにしづむ父母が
手向の水も吾子が爲

諸君ハ卽ち教師なり
其外普通の藝なくバ
能せざるにハ非ずして
進めよ學べよ皆共に

諸君聞かずや又見ずや
健げな婦人ハ吾れ一と
彼と我とを顧みて
學べよ研けよ諸共に

外賢居士

いとゞさびしき夕暮や
あハれにすだく蟲のねや
彼兒ハひとり父母や
思ひつゞくる果敢なさや

皆すこやかに己が儘
彼兒ばかりハ鳥部山
屍留めて去りし魂
應ふるものハたゞ反響

墓場の前に立つる花
惡しき病にをかされな

る能ハぞ情況可想

心順直に生長てと
恋の泡とぞ消え失せて

自由の筆結び得て妙頓や

實にやうき世ハ夢なれや
今日ハ彼世に旅立ちて
幽かに見ゆる眼前に
魂にハあらぞ煩ひし

ロングフェロー氏玉の緒の歌　巽軒居士

眠る心ハ死ぬるなり
あすをも知らぬ我命
などゝあハれに云ハ悪し

愛で育てたる事も皆
名のみ殘しゝそとばかな

昨日彼兒の顔見しが
言かハさん術無さか
顯れ來しハ亡き魂か
心の作る幻影か

世人多くは此理を解せず噫

我命こそまことなれ
墓ハ終の場所ならぞ
いふハからだのうへのこと

人の願ハよろこびか
人の願ハこれならず
今日よりまさる明日をまて

業ハ久しく時ハ馳す
皷の如く擊ち續け
死出の旅をぞはやそなる

我命こそたしかなれ
人ハ塵にて又散ると

人の願ハかなしみか
唯怠たらぞはたらきて

強き胸だも亦たえぞ
一ト日〳〵にちかくなる

懶惰家の金針

爭ひ多き世の中に
なりてます〳〵進むべし
牽かるゝ牛となる勿れ

如何に未來の樂しきも
共に之をば捨ておきて
はたらくべきの今日ばかり

すぐれたる人世に多し
勉め勵まば斯くならん

此身を寄せて先鞭に
言なき啞となる勿れ

如何に空しき過去なるも
われを忘れず神を知り

われとても人相同じ
ゆめ怠たらず勉めなば

長く殘さん此名をば

海より荒き世の中に
獨り漂ふ我友は
我名を聞きて進まなん

さすればの人の氣を張りて
如何なる運も事とせず
樂あるぞはたらけよ

少年某氏を悼む

やよ某よそれがしと
舟失ひて波の間に
我名を聞きて勇まなん

人間所至有青山

事業ばかりに心して
高きに至れ馳せゆけよ

碌々庵居士

喚べと叫べと答なく

いと高々な九重の
地ハ茫々と見ゆるのみ
月に譬へハ滿なれど
其容貌ハ壯健な
櫻の花の如くにて
實にこそ稀にみるところ
雪や螢の勤して
哀れ病に伏柴の
復たと歸らぬ旅出して

やよ 某 よそれがしと

天ハ冥々いと廣き
氏よ氏の年ハ三五なり
固より人の蕾なり
顏の色香ハ桃又ハ
尙質朴な有樣ハ
若干年の其の間
敢て一ト日も遑なし
戸扉を明けて墓なくも
あの世の人となりにけり

喚べと叫べと答なく

いと悲しげに吹來る
夜ハ凄々と覺ふのみ
深き學びの荒海に
互に鬪みハげましつ
寂莫しき秋の月の夕
寒氣さ嚴しき冬の夜も
いとゝ樂しく暮しけり
思ひ回せバ血の涙
袖もたもともしんめりと

やよ 某 よそれがしと

風ハ蕭々いと深更き
氏よ氏ハ吾と諸共に
うきつ沈みつ漂ひつ
のどけき春の花の朝
暑氣さ烈しき夏の日や
いと怠らぬ撓みなく
過ぎし昔をつくゞと
止めんとすれど止められぬ
ぬれて乾る間もなかりけり

喚べと叫べど答なく

氏よ氏ハ獨り門出して
訪ふに訪れぬ尋ぬるよ
只聞く歸鴉の鳴聲と
窓に倚りて山鳥の
顏の色香の桃又ハ
其容貌の壯健な
吾側近く髣髴と
今此文をかきならべ
來り讀せよ一ト壺の

松の綠

靜かに四方を見渡せバ

說下し得て妙

池の南よ河の北
夏ハ五月花に百合菖蒲
冬ハ水仙玉椿
四時遠ち近ちに咲き誇る
其麗しさ愛でたさハ
寫すべきにハ嵐ふく
或ハ香を愛で色を愛で
都雅に耽る人ゝの
理りとこそ思ハるれ
又彼是を思ひ換へ
心細かに見來れバ

轉し得て妙甚

何處に今ハ去りしかや
何の詮すべなかるべし
入相告る鐘の音
尾の長〳〵と悼むうち
櫻の花の如くにて
樣ハうつゝか幻影か
みゑつ隱れつする樣な
汝をまつる汝ぢそれ
酒ハ清けく香バしく

天外處士

春ハ櫻や梅に桃
秋ハ紅葉や菊に蓮
木々草々に枝に葉に
花ハ姿も色も香も
拙なき筆のとても能く
田の面水の邊杖を曳き
又其姿を慕ひつゝ
探り書ねて往き來ふも
左ハ去り乍ら退ひて
其の香其の色其の姿
姑しの夢裏の夢にこそ

又水の面の泡にこそ
一ト夜の嵐に又雨に
情も白妙峯の雪
旭日に融ゝる夫よりも
之れをゞ庭の松が枝の
緑の色も變へもせで
雨にも風にも又寒さ
耐へて忍びて忍び音に
家ゝ傾き庭も亦た
立つる操のいと清く
或ゝ心を慰めて

見よ盛りなる色も香も
はかなくちりぬる狀況ゝ
瓦の上に置く霜の
尚は恃みなく見へぞする
百年千歳よろづ代も
四時の花にも誘ゝれで
霜の夜雪の朝たにも
人ゝ幾代も變れども
荒れて寂しくなる迚も
或ゝ人の範となり
撓まぜ倦まず爭ゝぜ

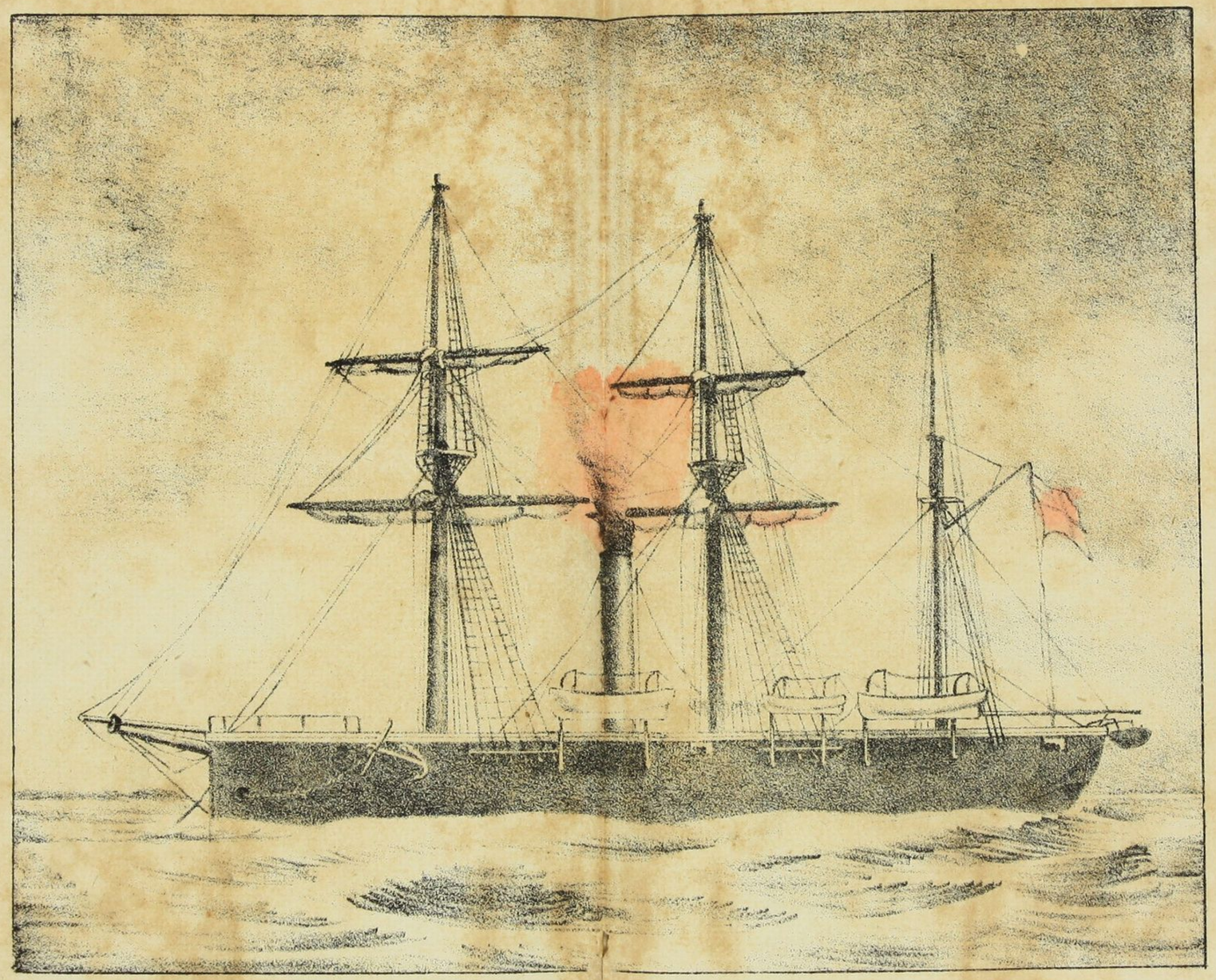
高く聳へて只獨り
其の潔よき心根に
恃み難なき物ぞかし
一時の夢に迷ゝされ
忘れて近く眼前り
或ゝ遊び又た驕り
山拔く力ある人も
黄金ゝ倉よ溢る共
父母の恵みゝ厚くとも
身ゝこれ波間の捨小舟
救の船を待つ迚も

永き榮を求めぬる
比べて見れゞ實に花ゝ
人とても亦左るにこそ
遠き世までの譽れをゞ
榮曜榮華に時得顔
末の榮を求めぜゞ
世掩う才のある者も
位ゝ如何に高くとも
妻子の扶け多くとも
寄る邊涙に袖ゝ濡れ
荒き波風爭でかゝ

底の藻屑となることを
人も見捨し身なりせば
西と東の別ちなく
花の色香に眼眩れ
身をも家をも亡ぼせし
努力忘れぞな錦なす
松の操を慕ふこと

免るべきか神も亦
今も昔も押しなべて
何國も同じ春秋の
松の緑を露知らず
例へ許多あるなれば
花をも愛でぞ緑なす
松の操を慕ふこと

碌々庵居士曰、晨爲榮華暮爲悄悴、細人生計之常態也、歳寒而知松柏之後凋、是君子之其名獨薫然乎万古者也歟、



英國軍艦ノ圖

英の國威を
地上に振ふ
誠に以あるかな

カムプベル氏英國海軍の詩

尚今居士

英吉利國の海岸を
一千年のその間
戰爭のみか嵐をも
敵を受くともたゆみなく
軍烈しくあらばあれ

固く守れる水兵よ
汝が建つる大旗は
支へ得たれば此後も
勇氣の限りひるがへせ
嵐も強く吹かばふけ

立ちくる海の浪間より
汝を援けたまふべし
其甲板ハてがらの塲
大子ルソンやブレーキの

汝が祖先あらハれて
蓋し祖先の軍艦の
大海原ハ其墓塲
死にし處ハ人しのぶ

勇氣凜冽紙上に溢る

軍烈しくあらばあれ

四方海なるプリタニヤ
山とたちくる波とても
慣れて我家に異ら也
船より放ち轟かし
軍烈しくあらばあれ

國の光とたてし旗
危難も都て解け去て
其時汝つゝものゝ

嵐も強く吹かばふけ

とりでも城も用ゐなし
千尋のそこの淵とても
いかづちなせる大砲を
波をわけつゝ進み行く
嵐も強く吹かばふけ

益々光り輝きて
大平の日にもどるらん
いさはし響て諸人が
歌に唱ひて慶びて
烈しき軍すみし時

グレー氏墳上感懷の詩

山々かすみいりあひの
徐に歩み歸りゆく
やうやく去りて余ひとり
四方を望めば夕暮の
唯この時に聞ゆるゝ
遠き牧場のねやにつく

忽ちにして
人の感懷を
勃起せしゝ
何等の老筆
何等の快筆

安樂限りなかるらん
強き嵐のやみし時

尚今居士

鐘ゝなりつゝ野の牛ゝ
耕す人もうちつかれ
たそがれ時に殘りけり
景色ゝいとゞ物寂し
飛び來る蟲の羽の音
羊の鈴のなる響

猶其外に常春藤しげき
近よる人をすかし見て
訴へんとや月になく

かしこにゝ楡又こゝに
其下かげにうづだかく
壙に埋もれてこの村の
のきの燕もにゝとりも
あさぼらけにぞなりぬれば
冥土の人の眠をば

五十四

塔にやどれるふくろふの
我巣に寇をなすものと
いとあわれにも聲すなり

あらゝぎの木ぞ生茂る
苔むす土の覆ひたる
古人長く折眠る
木魂に響く角笛も
かまびすしくゝありつれど
覺すとこそなかりけり

死にたる人のはかなさよ
妻のよなべも誰が爲ぞ
爺の歸りをよろこびて
曾てこの世に居し時ゝ
山もはたけも其くゝに
繁れる森も其斧に

功名とても浮雲の
この古人の世の益と
身を煖むる爛火も
愛るわらべがかたことに
小膝にすがることもなし
麥も小麥も其鎌に
手荒き馬も其むちに
まかせて君ぐ儘なりき

過るが如きものなれば
骨折するも不運をも

五十五

ねびしき妻子の暮をも
富貴門閥のみならず
浮世の榮利多けれど
草葉の露もおろかなり

苔にうもれし古人い
あたりまばゆき屋の内に
樂器の音を聞くとも
ひつき肖像美を盡し

笑ふべきにいあらずかし

五十六

みめ美しさをとめでも
いつか無常の風吹かば
黄泉に入るの外ぞなき

墓場の上に寺をたて
頌歌の聲に合すなる
身の不德とな思ひぞよ
人の尊敬多くとも

ひとたび絶ゑし玉の緒を
へつらふ人のほめ言も

可想々々

考へみれば廢れたる
世にすぐれたる量ありて
詩文の才も多けれど
學びの海い廣けれど
心の性い賢きも
世のはまれをば聞かずして

つなぎとむべき術いなし
長き眠い覺すなじ

此古墳の古人も
國を治むる德を具し
あらはれずして失せけるが
渡る船路を知らざれば
身い賤しくて貧なれば
空しく鄙に終りけり

深き水底求むれば
高き峯をば尋ぬれば
千代の八千代の昔しより

實に此墓に埋もれて
詩ゝ拙くもミルトンに
クロムエルにも比ぶべき

議院の議士を服さしめ
國の安危を身に委ね
此等の事ゝおしなべて

輝く珠も有ぞかし
香る木草の多けれど
人に知られで過にけり

業ゝおとるもハムデンに
國に軍を擧ぎとも
人のかばねやあるならん

人のおどしも外に見る
高き譽望を民に得る
古人何ぞあづからん

惠ゝひろく及ばねど
不德もいとゞ少なしや
民をなやめて利をあみす

まことをかくすそら言に
且つ巧なる詩文もて
是ゝ都の弊なれど

此處に生れてこゝに死に
其身ゝ淨き蓮の花

又常々のふるまひに
人を殺して王となり
夢にも見まじさるとゝ

耻るを忍ぶ心の苦
富貴に媚る世の習
未だ此地に及ばざる

都の春を知らざれば
思ひゝ澄める秋の月

實に厭ふべき世の塵の
されど収めしなきがらの
建し石碑い今もあり
醜しとてもたび人の

碑面にゑれる名に年齢よ
紀念の功い有ぞかし
文句を引きてゑりたるは
蓋し此世に生れゑて

無限の感情

六十

心に染みしことぞなき
しるしの爲と側近く
文い描く彫りさまい
憐を爭ひかざらん

記しに文字い描くも
又有がたき經文の
人に無常を諭す爲め
程なく死ぬる其時に

別れの惜しき事もなく
心の外に打捨てゝ

眼の光り止むときは
たましひ体を去るときは
たとひ燒くとも埋むとも

偖又此に古人の
いつか歸らぬ旅に立ち
如何せしやと思ひやり

浮世の花の榮をバ
去り行く人はなかるべし

戀しかるらん身のやから
いたく慕はん妻子ども
人の思ひい消ないせじ

いれい書けど余とても
過ぎ行く後い世の人の
碧るともあるならん

しからん時い此さとの
老人斯くぞ曰ふならん
昇る旭を見バやとて

又彼處なる川バたの
わだかまりたる根の側に
流るゝ水に打臨み

又彼處なる常盤木の
かしら傾けうでを組み
とゝかぬ戀の口惜しさ

六十二

頭に霜を重ねたる
我僧い彼れが朝早く
岡に登るを常に見さ

枝のび垂れし山毛欅の木の
身を横たへて晝いこひ
其常なきをかこちけん

木立の下にさまよひて
知る人なさの歎かしさ
世のうさなどをかこちけん

さるにひと日い彼の人を
絶て見るとなかりけり
野にも森にも川邊にも

又其のつぎの朝ぼらけ
まさしく彼れの爲なりさ
彼の山櫃の陰にある

碑文

土に枕しこの下に
富貴名利もまだ知らず

慣れし岡にも樹陰にも
其翌朝になりぬれど
身をバ現いすことぞなき

屍送る歌さけバ
君い字を知る人なれバ
碑文を讀みて知り給へ

身をかくしたる若人い
學びの道も暗けれど

一結悠然

六十三

あゝれ此世を打捨て
あの世の人となりよけり

仁恵深き人なれゞ
天も憫み報ひけり

憂き人見れば涙ぐむ
(外に詮すべなき故に)

ひとりの友のありしとき
(外に望みゝなかるらん)

これより外に此人の
善し惡し共に尙深く

尊るとても詮いなし
たましひ既に天に歸し

後の望みをいたきつゝ
神にまぢかく侍るなり

碌々庵居士曰、百年同謝西山日、千秋萬古北邙塵、嗚呼人生之須臾蟪蛄不レ啻、宜

哉託二餘音於悲風一

立見尙ゟ

軍旗の歌

二千五百年以來
光り輝く日本國

その國守る軍人よ
汝の仰ぐ大旗は

我大君の御標ぞ
君の御言をかしこみて

いかなる敵をも打攘へ
忠と勇とに此旗を

地球の上に輝かせ
いかなる寇をも打攘へ

忠と勇とに此旗を
地球の上に輝かせ

昇る旭ともろともに
代々の皇のかみぐは

汝を援け玉ふべし
汝の功を立る場は

此八洲國の内ならで
神功皇　后豐太閤
忠と勇とに此旗を

四方海なる日本國
未賴母敷金城は
翼さ猛しき鷲迎も
我皇國に寇を爲す
雷ちなせる大砲と
いかなる敵をも打攘へ
地球の上に輝かせ

六十六

外つ國々に在りとしれ
昔しの功績想べし
地球の上に輝かせ

砲臺よりも艦よりも
汝等忠義の軍人ぞ
爪牙鋭き獅子迎も
兇者共の在るならば
電光あざむく劔ぎもて
忠と勇とに此旗を

皇國の靈と軍人が
昔い弓矢鎗刀
汝の帶べる銃劔は
揮ふべき時揮ひつゝ
此大御旗を推し立てゞ

我大君の御標ぞ
益々光り輝きて
吾々陸海軍人の
祝ひ唱ひて悅びて

用ゆる利器い何物ぞ
今は銃砲軍艦よ
大和魂ある人の
鷲をも獅子をも打攘へ
いかなる敵をも打攘へ

國の光りと建る旗
寇を平げ民を撫で
功績譽めて諸人が
榮譽は限りなかるべし

六十七

烈しき戰すみしとき
益々光り輝きて
御稜威ハ世界に響らん

賊兵を弄する者をして
讀ましめバ
刃に血ぬらぎして降を
乞ふならん

・

抜刀隊の歌

吾れは官軍我敵は
敵の大將たるものハ
是れに從ふ兵士は
鬼神に瓜ぬ勇あるも
起せし者は昔より
敵の亡ぶる夫れ迄ハ
玉散る劍抜き連れて

國の光りと此旗と
萬世不朽の帝國の
御稜威ハ世界に響らん

、山仙士

天地容れざる朝敵ぞ
古今無雙の英雄で
共に慄悍決死の士
天の許さぬ反逆を
榮へしためし非ざるぞ
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべレ

皇國の風と武士は
維新以來廢れたる
亦世に出る身の譽れ
刃の下に死すべきに
死すべき時は今なるぞ
敵の亡ぶる夫れ迄ハ
玉散る劍抜き連れて

其身を守る魂の
日本刀の今更に
敵も味方も諸共ゑ
日本魂あるものは
人に後れて耻かくな
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべレ

前を望めハ劍なり
劍の山に登るのハ
右も左も皆劍
未來の事と聞さつるに

此の世に於ひて面のあたり
我身のなせる罪業を
賊を征伐するが爲め
敵の亡ぶる夫れ迄は
玉散る劍抜き連れて

劍の光閃くは
四方に打出す炮聲は
敵の刃に伏す者や
絶て果かなく死する身の
其血ハ流れて川をなす

七十

劍の山に登るのも
滅す爲に非らずして
劍の山も何のその
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

雲間に見ゆる電か
天に轟く雷か
丸に碎けて魂をの
屍は積て山をなし
死地に入るのも君の爲め

敵の亡ぶる夫れ迄ハ
玉散る劍抜き連れて

彈丸雨飛の間にも
進む我身ハ野嵐に
果かなき最後を遂る共
死して甲斐ある者なれば
我と思はん人達は
敵の亡ぶる夫れ迄は
玉散る劍抜き連れて

進めや進め諸共に
死する覺悟て進むべし

二つ無き身を惜まぞに
吹れて消ゆる白露の
忠義の爲に死する身の
死するも更に恨なし
一歩も後へ引なかれ
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

世上不義身恠の徒をして須らく讀ましむべし

我れ今此に死なん身い
捨つべき者は命なり
忠義の爲めに死する身の
永く傳へて殘るらん
義もなき犬と言はるゝな
敵の亡ぶる夫れ迄い
玉散る劍扱き連れて
碌々庵居士曰、句々扱刀、字々流血、是之謂二字稱題、々稱一句

勸學の詩

晉し唐土の朱文公
君の爲めなり國の爲め
縱令屍い朽るとも
名は芳ばしく後の世に
武士と生れた甲斐もなく
身恠者ぞと謗れな
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

尙今居士

よに博學の大人ながら

輕々觀過すべからず句々段々殖千金

わが學問をすゝめんと
一生涯い春の夜の
國の東西世の古今
學びの道に就くものい
同じ多少の感慨を

春の初花秋の月
都て此世の物事に
わが學藝を省りみて

少年易老の詩を作り
夢の如しと嘆きけり

人の高身を問はゞして
いかに才能ありとても
起さぬとのあるべしや

夏のみどり葉冬の雪
心をとむる時あらば
過る月日を思ふべし

池のみぎはの春草は
軒端に茂る桐の葉ゝ
此年も半バ過ぬるを

年の月日ゝ長けれど
ひとよの如く思いれて
螢や雪の光りにて

昔の人の學問ゝ
なは賢人の嘆きあり
枝に小枝に末葉まで

七十四

みじかき夢も覺ぬまゝ
吹く秋風にさそゝれて
ふみ讀む人ゝ知らぞやゝ

難波入江の村あしの
わが身の上のはづかしさ
ふみゝ讀めども業ならぬ

唯ひとすぢの道なれど
今ゝ學藝多端にて
いかで凡夫の能すべき

左ゝ云ふものゝ諺に
海のはじめゝひとしづく
心をこめていつまでも

たとひ多くにわたらぬも
身の爲となる多からん
蜂に能あり蜜つくる

昆蟲すら斯の如し況や人に於てをや

山のはじめゝ一塊土
いかに急げと詮ゝなし
怠らぬこそよかりけれ

唯一藝を修めなバ
蜘蛛に藝あり網をはり
何とて蟲に及バざる

町隣の訓誡

勉め〳〵よたゆみなく
難き事とて厭ふなよ

進み進めよよどみなく
學の海ゝ升路あり

七十五

海より深し
山より高し

敎の山にしをりあり

秋夜客舍

櫻さくてふ春過ぎて
茂り〳〵て其後い
枯れて淋しき夜半の月
背負ふかりがね文傳ふ
永き言の葉故郷の
思ひまいせバ七重八重
眺めて心涙持つ
蟲の音色も斷續に
響に旅の夢さめて

起首人意の表に出づ勁筆々々

七十六

丈夫何かい怯るべき

訥々庵居士

夏の草木も生茂り
秋の嵐に吹き枯野
空に輝くさやけさを
傳ふる文いと永く
音信とこそ知られけり
重なる雲の故郷を
此うき思ひ誰しらん
聞へて憂きし鍾の聲
憂にうき來るうき思ひ

子も亦然るや

春の朝の花にまた
思ひ餘りてふるさとの
柴の戸あけて庭に出で
訪ふものとていあらぬ身の
我と景とのふたり連
誰にかつげん此うさを
空を眺めてまた寐屋に
つく〳〵聞けバ軒端ふく
實に物うきい秋ぞかし

夏の涼の舟遊び
事を思ひて寐もやらず
徘徊躑躅誰人も
うつろう庭の面景は
つれいあれども我なれバ
憐み給へ天津空
入りて枕を侶となし
風の聲だに悲しさよ
實に物うきい旅ぞかし

碌々庵居士曰、錦繡如借織女之手者

小楠公を詠するの詩

姓不詳

七十七

嗚呼正成よ正成よ
黒雲四方にふさがりて
惡魔ゝ天下を横行し
あなずり果て上とせず
絶る間のなき人馬の音
芳野の山に花見んと
君が御代こそ千代〳〵と
いづれの時にあるなるや
嗚呼大君の御爲に
この世の塵を拂はんと
遠くあなたを見わたせば

公の逝去のこのかたゝ
月日も爲めに光りなく
下を虐げ上をさへ
吹き來る風ゝなまぐさく
春ゝ來れども花咲かぞ
訪ひ來る人ゝ絶てなく
囀る鳥の聲聞は
なげかわしきの至なり
振ひ起りてけがれたる
する人とてはあらざるか
金剛山は巍峨として

雲の上まで屹立し
見ゆる菊水の其旗は
父の賜ひしこの刀
賊の頭らを斬せむ爲め
國の仇なり父のあだ
拂へバ來る夏の蠅
つら〳〵思ひめぐらさば
若しも病に冒されて
不忠不孝と誹られむ
死出のなごりに今一度
君の御影を伏し拜み

繁る林の木の間より
實にこそ國の寶なり
腹をきれとの爲ならぞ
にくさもにくし彼の賊等
斬て捨ずに置べきか
頃は正平戊子の春
元來よわき此からだ
空しく失せし事ならバ
討死するは此時ぞ
願ひかなへて親面り
生きて皈れのみことのり

聞て切なる胸のうち
書き殘したる梓弓
誓ひし者は百餘人
ものともせずに斬まくり
討死せしはいさぎよく
都も遠き村里の
忠臣孝子の鑑ぞと
天地と共に傳はらん

此篇も亦新陳代謝の法を以て轉々人の意外に出で通篇滑車の數馬力を加へるが如し

新体詩林發行の祝詞

寒來暑往は天地の理
大陽西に沒すれバ
蟹が這ふてふ横文字は
耶蘇基督の教法は
濫船は遂に帆船を
其の外新事が舊事をバ
茲に浪花の花と咲く
江湖の眷顧彌や增して
三十一ト文字の倭歌
此の文明の社會より
所謂新体詩林てふ
人の心を風雅びにし
獨り光りを日月と

哀れといふも愚なり
引きてかへらぬ赤心を
雲霞の如き大軍を
君の方をバ枕して
いさましかりける次第なり
女わらべに至るまで
響る其名は香しく
天地と共に傳はらん

一山居士

新陳代謝は世の習ひ
月東海の波に浮き
鳥跡の字を壓倒し
佛道儒教を蹂躙し
活字は木版銅版を
排斥驅逐せざるなし
新体詩林も日に月に
尚古者流の愛してし
七絶五律の唐ら詩たも
遂に斥け遠ざけて
名は只名のみに止まらず
又勇氣をも振はしめ
爭ふ實を早晩に

同感

見るは今より知られけるひとたび限る逢瀬なく
歌を集めて月三度
他かの雑誌に比べなば
文雅の点より評するも
冨士山よりもいと高く
況して時運の進むをば
或は五回刷り出す
誰れか悦ばざる可きぞ
學べよ此詩を好む人
餘りのとの嬉しさに

ヒアヽヽ

能く祝詞の

只悲さは一と月に
左れど陳腐の文や詩や
或は五回刷り出す
世の實利より見來るも
爲めに蒙ふる恩澤は
琵琶湖水より深からん
待て遂には月三度
望みも既にある者を
勉めよ新体詩林記者
是れ亦文事の改良ぞ
艶も飾も長々と

体に倣ふ

思ふ言の葉書き綴り
聊か祝ふこと然り

明治十九年除夜の吟

碌々庵居士

頃しも明治十四年
後に眺めて東なる
武藏の原に漂ふて
夫より西の都なる
音に名高き加茂川の
浪華の昔の繁さをも

長き月日もいつの間に
我身三世を倫畧に

懸ひなつかしき故郷を
ゆくゑハ遠き東國路の
みとせの秋も過ぬれハ
もと王城と呼ばれなん
川邊にすまひ今は又
いと面白に暮しけり

消えて墓なくなりぬるぞ
たとゑて言ば水の上に

うきつ沈みつたへまなく
ゆられて後は何處とも
鷗か又ゝ櫓も棹も
思ひやるさえ悲しきや

指を屈めて算ふれば
七千二百の日子をも
送りて今ゝ初より
影も形もぼんやりと
實に人間のなすとは
風に吹かるゝ一片の

風に吹され涙に又
定められざる萍か
涙にとられし捨小舟
身の毛もよだつ計りなり

但に過ぎゆく二十年
今日よ明日よとむざゝに
立てし志業ゝ朦朧夜の
窓に寫せし水梢かな
總て塞氏の馬又ゝ
煙と言も道理なれ

春夏秋冬自轉して
河の速瀬か導火せし
既に離れし箭の如し
天下萬國上ゝ是れ
吾輩に至るまで
寐ねぞに守れ友人よ

彼れ此れ思ひ合すれバ
掃へどもまた生ひ來る
淵の深さもまだおろか

復たと歸らぬ其樣ゝ
鉄砲丸か弓弦を
去れバ今復めぐり來て
貴顯紳士や下ゝ又
守りて明す師走ぞや
ゝやつげ渡る夜半の鐘

塵や埃の如くにて
深き恨みゝ九重の
池の氷が時ゝに

とけて還たもや凝結れる
長き流れに比ぶるも
論にあらぬぞ何事も

斯る愁と恨みとを
ふして思案の中頃に
フト眼に觸れし書架の酒
是れ幸福よ兼てより
しきりに獨り酌む酒も
思の外に恨愁い

八十六

長き愁ひい黄河なる
固より同じ歳月の
たとふべき者無かるらん

遣るもの迚いあらざるか
嗚呼なさけなと仰向バ
其名い麥酒と稱なん
不時の需に備ふるかと
坐に醉ひて面白と
以前と一入增にけり

嗚呼なさけなやく
涙と共に訴へて
嗚呼なさけなやく
愚なとよ夫れよりい
昇る旭日と諸共よ
勉めいげみて繻くも

女子に告ぐ

我が日の本の花ぞかし
我が日の本の人々の
外つ國人も仰ぎ見て
實に此花の咲くときい

起筆の趣向至れり盡せり

この憂きうさを天地に
喚べど叫べど答なく
この憂きうさを吻くい
歳月更にあらたまり
茫然たゆまず怠らず
蓋し晩しとせざるなり

明日香小史

我が日の本の光りぞと
世界に誇る作樂花
愛でぬいなしと聞ぞかし
花てふ花い多けれど

八十七

其の色其の香其の姿
五大洲中第一の
理りなれや宜なれや
數にゝあらぬ草木にも
然かゝれどもつくゞと
花てふ花も光りてふ
櫻に勝さる花にあり
物言ふ花と人ゝ言ふ
左れど昔ゝ此花を
其養ひを怠りて
自からなる生ひ立ちに

冒頭の筆意轉し得て妙なり

並べ見るべき花ぞなき
花と讀けん唐詩も
嗚呼樂もしや日の本の
世界に誇る花ゝ咲く
思ひ廻せゞ日の本の
光りも佐久良にあらずして
櫻にまさる其の花ゝ
世の乙女子や是ならん
知らざる人の多きより
培ひもせず芸ぎらず
任せし故に大方ゝ

見るべき花も咲かぎして
開けし御代ゝ畏くも
教ふる園を設られ
恵み到らぬ隈もなし
時に後れぎ先ちて
朝な夕なに置き増さる
何ぞかゝ花の咲ざらん
其の色其の香其の姿
良きに改め人がらを
善き世を造り類ひなき
皆な此花に由るぞかし

此邊の數句眞に文明の原素と云ふべし

散りにしとの哀しさよ
物言ふ花を移し栽へ
東まの東し西の西
物言ふ花に物言ゝん
教への園に身を委ね
恵みの露に沾ゝゞ
さて此の花の咲くときゝ
佐久良にまして國俗を
高きに進め比ひなき
善き人作り出さんゝ
かゝるときこそ爭ひて

外つ國人も仰ぐべく
是れ日の本の花にして
草木の花ハ佐久良花
盛りに香はる時にあり
時を違へず咲きぬれど
姿比らべて咲き亂れ
何の時にあるならん
物言ふ花よ乙女子よ
御代の惠みを能く思ひ
心に掛けて祈るべし

薄命の歌

九十

我が國人も慕ふべし
又日の本の光りなり
皇國の花ハ物言花
作樂の花ハ年毎に
ふたつの花の花比らべ
世界に誇る其春ハ
早く見まはし逢ハまはし
此の理りをよく悟り
皇國の春に入らん日を
心に懸けて禱るべし

扇岳逸士

通篇恰も蒸氣機關の運轉するか如く滑車回週するが如し畏るべし畏るべし

骨身を透す山おろし
黑白別たぬ烏羽玉の
わがものなりと思へども
小兒ハ母のふところに
吹き來る風ハいや寒く
降り積む雪ハいや深く
かなわぬ時の神頼み
消ゆる命もたえ〳〵に
たすけ給へよオ、神よ
助けたまへよこの兒だけ
已が駒よりマンテルを

波瀾なり

道なき廣野凄じく
暗夜に母ハ兒をつれて
降り積む雪ハ身に重く
すや〳〵ねむり餘念なく
ふけゆく夜ハいや暗く
手足凍えて力なく
潔き心もあわ雪の
くもれる聲で叫ぶよう
たとひ妾ハ死ぬるとも
凍えぬようにして給べと
取りて胸地ハあらハれつ

めでつる孩子が身にまとひ
燒野の雉子の翼より
強ひてつくれる笑ひ顏
熱き涙ハ淵瀨なし
恩愛深き親と子が
鐘ハ何處か聲遠く
牧場に求食る猜狐
さてその次の朝ぼらけ
雪の衣手そがもとに
眼の中に死出の霜
花の姿ハ殘れども

鏃を羽がこむ夜の鶴
暖かなりき慈母ごゝろ
冷めたきキッスも是限り
其まゝ沈む雪の床
永き別れとなき出す
諸業無常とつげ渡り
最とも悲しく聲すなり
旅人此處を過ぎけるに
一人の婦人横たハり
頰ハつめたく又かたく
浮世の夢ハ痕もなし

宛然如視

旅人やがて懇ろに
小兒ハ見あげ打笑みて
楓の如き手を出して
胸も張り裂く計りなり
嗚呼深ゝかりき慈母情
碌々庵居士曰、一讀三嘆、世之爲子者須以涙眼

讀爲、

上衣をとれバ餘念なき
わが慈母なりと思ひしか
乳房をさぐる其の樣ハ
嗚呼いぢらしき兒心よ
何とて神ハ無慈悲なる

ブルウムフヰールド氏兵士歸鄉の詩　山仙士

涼しき風に吹　れつゝ
椅子にもたれてあるさまハ
その坐をしめし腰掛の
ありし昔の我父の
實に心地克くありにける
堅く作れる臂掛に

よそぢの昔荒〳〵と
猶あり〳〵とみゆるなり
元にかゝらぬ其音色
満る思は猶切に
忘れんとして忘られず
後に掛けし古畧暦
ひら〳〵〳〵と誘ハれて
嵐に逢ふて翻へる
一枚づゝに又下へ
數も合せて二十年
暮せる年の數取りぞ

刻みのこせる我名前
柱に掛けし古時計
聞きて轟く我胸に
ハりさく如く堪ゞたし
嗟歎に堪へぬ其時に
忽ち寄するそよ風に
上るハ是ぞ陣前に
小幡とこそハ見ゆるなれ
下りて落るその紙の
故郷をはなれ遠國に
打しも家の入口へ

實況寫得妙

來る一羽の知更鳥ハ
我をつら〳〵不審顔
はにかむ如く見へにけり
嗚呼老ひたりや老にけり
昔の友にあらぬかと
斯く心中に彼是と
眺めにながめつく〴〵と
苔の席を眺むれバ
其美さあてやかさ
是も誰ゞわざ稚子の
數て樂むものなりと

人に狎れたる鳥なれど
怖づるが如く且つハ又
口に云ハねどそのふりハ
それに居ハする武士は
尋ねる樣に見へにけり
物を思へる其間
窓の限に織なせる
緑の色の青〳〵と
又と類ハあらなくに
晨　ゆふべの手毛さみに
推量すれバいとゞなは

思ひゝ更にいやまさり
年をも日をも打忘れ
わつと計に啼にけり
あゝ我ながら愚まし
過ぎ越し方をさまゝに
辱しく又口惜しく
軍の神をのゝしれり
可惜勇士の失せぬるは
殺場放火分捕の
今更思ひめぐらせば
我身を守るたからぞと

胸ゝそゝろに塞りて
前後も知らぬ立上り
稍時ありて心付き
再ひ椅子につくゝと
思ひつゞけて按ずれば
意ゝず髪も逆立ちて
名譽の淵に落ち入りて
實に傷敷き事ぞかし
其有様をつらゝと
あら恐ろしやむごたらし
頼みたのめる劍こそ

我身の罪をかさねたる
恨ゝいとゞいやまされ
二人の影ぞ見ゆるなる
あらしの老と見うけたれ
計らぬめぐり逢ふ坂や
せきくる涙だ關あへず
嘻し泣きにぞ泣きまける
目元涼しき小女子に
これナンセーと手を取りて
こゝに居やるゝやうゝと
そなたの伯父のチヤーレぞと
仇と思へばなはさらに
聲する方をうちみれば
此影こそゝ稚子と
やがて入り來る我父ゝ
我子の顔を一目見て
我を抱きて老の身の
ろゞ傍にイめる
腰打屈め老人ゝ
口を合ゝすもあまる愛
イスパニヤより歸國せる
云へば女ゝ近寄りて

しらをの如き指をあげ
そと打彈さぐわんせなく
嗚呼我ながら愚なり
繰返へすこそ無益なれ
此老卒ぞ幸多く
心に掛る雲もなし

いとい曇れる老の眼を
笑ふ姿ハ可愛ゆらし
身の上バなし斯く長く
それに付きても兎に角に
浮世の中に今ハまた

碌々庵居士曰、句々流暢、意思巧妙、自有二珠玉之聲一、又曰、一結隱絶、

日本魂

人も斬るべし我身をも
二千年來遺傳せる

落花居士

唯義によりて殺すてふ
我が寶なる日本魂

國と君とに身を捧げ
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る

字々悲壯句々活潑全篇亦皆膽と云べし

小さき國とて侮るな
骨肉共に膽なりと
忠義に滿る神洲の
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る

國の爲めなり君の爲め
皇國を護る大丈夫
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

見掛によらぬ中のみハ
人に知らるゝ日本魂
男兒の數ハ二千萬
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

捨つる命ハ親も子も

忘れて知らで一筋に
前兵傾ふる其の屍
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へゞ玉ぞ散る

海を蔽へる軍艦の
死せざる中ゝ何のその
みがき上げたる我腕の
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へゞ玉ぞ散る

彌やまし勵む日本魂
飛び越へ進む後騎隊
日本刀ゝ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

烟をまきて來るとも
爭かで恐れん日本魂
續かん限り試めしみん
日本刀ゝ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

汝聞かずや神后や
三韓征伐竹を破る
全八道の民草ゝ
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へゞ玉ぞ散る

又聞かざるか十萬の
浪蹶分け來る艨艨を
烈しく吹き出す颶風にて
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へゞ玉ぞ散る

下りて豐臣大閤の
勢ひ猛き日本魂
其威其武に靡きしを
日本刀ゝ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

元兵我を襲はんと
見て取り怒る日本魂
三人の外ゝ亡せり
日本刀ゝ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

サーこいの四字何そ壯快なる

サーこい來れいざ來れ
ならば手柄に打て見よ
兵士の如何に強くとも
見よや見よ〳〵碧眼奴
朝を拂へば玉ぞ散る

デニソン氏船將の詩

暴威を以て下を馭す
天地も容れぬ罪なるに
阿鼻の地獄も及ばじな
嗤ふものゝあるなれば

獅子諸共に驚も來よ
皇國を護る日本魂
劍は如何に鋭くも
日本刀の腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

尙今居士

人の此世の鬼なるぞ
其過ちの深きこと
若しや今しも壓制を
わが此歌をよく聽て

其身を深くいましめよ

將たる船の乘組の
英吉國の人なれば
其船將の壓仰を
將が性質猛くして
無きのみならず針ほどの
免すことなし斯て世に
船人どもの心中に
消るひまなくなか〳〵に
人をも身をも諸共に
船將常に望むらく

曾て勇々しき武士の
自由の空氣吸ひなれし
勇のみならず信あれど
深く怨みて措かずとよ
慈愛の心露ほども
罪も嚴しく糺し問ひ
將ゞ暴威いやつのり
燃る怒のろのほのは
をりさへあらば燃へ出で
燒かんゞすなり然れども
いつか勳功あらはして

わが船の名を轟かし
千萬人に呼ばれんと
湊を過り岡に沿ひ
北に南に何處となく
大海原の眞中にて
帆を打揚げて來る船は
軍の船にまぎれなき
喜び外にあらわれて
船人どもゝ銘々の
眼の中におのづから
將ハ聲色高らかに

古今未曾有の英雄と
一途にこゝろ傾けて
岬を廻り島を歷て
殘るくまなくたゞ渡り
北をはるかに眺むれば
是ぞ正しく佛蘭西の
わが船將の面色ハ
言葉もいとゞいそがわし
心にたくみありければ
喜ぶ色の見えたりと
ものども船を追ふべしと

一と號令を下すまゝ
敵にまぢかく進みゆく
常に怨みし大將を
大砲はなつものハなし
實にいかづちの落るごと
天地も破裂するばかり
帆架もわれて粉微塵
銃丸繁くふりさたり
甲板のみか帆柱も
生きとし生けるもの共は
もの言ふともかなハねば

風にまかせて我船ハ
こゝに乘組一同は
にらみて腕を叉さて
されど敵の大砲は
聽きわたるおそろしさ
樹木も折れて波に落ち
甲板裂けて容なく
雨かあられか怖ろしや
人の腦やら血汐やら
右に左にうち倒れ
倒れしまゝに顏と顏

見合す姿凄まじく
絶えんとしつゝ船將を
嘲り笑ふ氣色あり
頼みし人もことゞく
われを賣りしぞ口惜さ
辱と恚のせりあひに
齒がみをなして叫べども
かバねの上に倒れけり
實に憎るべし惡むべし
失ひしこそはかなけれ
經ぬといへど船將や

血汐の中に玉の緒の
見かへる眼おのづから
將ゝ功名立てんとて
我を嘲りにらみつゝ
心のうちゝ堪へられぬ
顏色青く赤くなり
終に痛手の疵おひて
嗚呼壓制よ嗚呼暴威
數多の勇士いたづらに
其のち多く年月を
船人どものしかバねゝ

水屑となりて海底に
さりとも見えぬ波の上に
今沈みて殘るらん
浮べる鷗二三四

碌々庵居士曰、意到筆隨、全篇覺雲煙之繞囲、妙、

一月元旦

蘭竹居士

通篇快と誠と以て眼目となす

春ゝ來にけり新玉の
過し憂こと打ち拂へ
年の始の元始祭
風に靡かればら〳〵と

明治もこゝに十九年
人のこゝろもあらたまり
四方を望めバ日の丸の
靡く姿ゝ愛たけれ

春ゝ來にけり白雪の
人のこゝろもしらゆきの

晴て見渡す銀世界
昨日の鬼も立去りて

今日の新玉賑しく
國の御旗に輝きて

春ゝ來にけり青松の
愛たき春のあかつきを
替らぬ色の青みどり
操正しくこの春を

春ゝ來にけり呉竹の
物をも言でさゝやきて
霜をも雪も打ち除き

百八

昇る旭日ゝびか〳〵と
靡く姿ゝ愛たけれ

操正しく新玉の
向えて待べる其すがた
さすが日本のたましいか
待べる姿ゝ愛たけり

庭に彳むその樣ゝ
過し憂こと打ち拂え
愛たき春の新玉を

向へて待べる嬉しさよ

春ゝ來にけり寒梅の
愛たき春と諸共に
物をも言で笑がは
四方に吹出す其かはり

春ゝ來にけり同胞の
松竹梅と諸共に
錦の御旗押し立てゝ
御國のかはり吹き散す

待べる姿ゝ愛たけれ

思をこめし新玉の
はころびかゝる其そがた
花のかはりゝいつまでも
散す姿ゝ愛たけれ

時ぞ來れり同胞よ
操正しく吾れ先きに
アルプス山の頂上に
散す姿ゝ愛たけれ

春ハ來ヨけり諸人の
英吉利國や佛蘭西も
大西洋のいちめんに
四方に輝く日の丸の

春ハ來にけり諸人の
日本魂あるものゝ
冨士の御山のいたゞきに
世界を照す日の丸の

兵士の歌

なす可き時ハ今なるぞ
魯士亞亞米利加何のその
錦の御旗ひるがへし
光る姿ハ愛たけれ

喜ぶ時ぞ來りける
磨き磨きし其果ハ
御國の印し押し立てゝ
光る姿ハ愛たけれ

大庭景一

皇國の爲と君のため
我國むかし忠臣と
皇ら帝の御爲に
ともに屍ハ消れども
我大君の大御稜威と
共に世界ヨ輝けり

皇國の爲と君のため
國に寇なす敵あらバ
君に叛ける賊あらバ
彈丸も中らバ避けはせず

力を盡すハ人の義務
仰ぎ尊む楠公は
湊河原の朝露と
香しき名は今もなを
我日の本の國光と
共に世界に輝けり

兵士となるハ民の義務
進んで之を打攘へ
進んで之を打攘へ
劍も我身を刺ばさせ

功名手柄顯して
其名を世界に輝かせ

皇國の爲と君のため
死人の山を踏越て
屍ねをあれ野に曝すとも
天翔り來て事あらば
精國神に祭られて
其名を世界に輝かせ

碌々庵居士曰、一讀汗ニ於全軀一者許多矣、宜ク使ニ此篇一歸ル徒勢一

我日の本の國光と
其名を世界に輝かせ

死するハ兵士の常なるぞ
劍花の下に斃るべし
なを其靈は消やらぬ
國と君とを守るべし
我日の本の國光と
其名を世界に輝かせ

西郷追慕の歌

夫れ達人ハ大觀す
榮枯ハ夢か幻しか
眞如の月の影清く
何を怒るやいかり猪の
勇みにいさむはやり雄の
留り難さぞ是非もなき
若殿原にむくひなん
諸手の軍打破れ
霜の紅葉の紅ゐの
薩摩武雄のをたけびに

海舟散人

拔山蓋世の雄あるも
大隅山の狩倉に
無念無想を觀ぜらん
俄にげきする數千騎
騎虎の勢ひ一徹に
唯身一を打捨てゝ
明治十年の秋の末
討ちつ討れつ頓て散る
血汐にそめど顧みぬ
打散る玉ハ板屋うつ

霰たゞしる如くにて
木魂にひゞくときの聲
落つるゞ如き有様を
あな勇しの人々や
腕の力もためし見て
いざ諸共に塵の世を
唯一ト言を名殘にて
宗徒の輩もろともに
心の中こそ勇しけれ
昨ゝ陸軍大將と仰れ
たぐひなかりし英雄も
面をむけん方ぞなき
百の雷一ト時よ
隆盛打見てはゝぞ笑
亥の年以來義ひし
心に殘る事もなし
脱れ出でんゝ此時と
桐野村田を始とし
煙と消えしますら雄の
官軍これを望み見て
君の寵遇世の譽れ
今ゝあへなく岩崎の

生徒體操ノ圖

山下露と消えはてゝ
無常を深く感じつゝ
唯悄然と隊伍を整へ
折しもあれや吹き下ろす
岩間にむすぶ谷水の
悲鳴をるかと聞なされ

末數句最流暢

碌々庵居士曰、結尾有レ力、議論適切、固不レ要二腐辭一

老成之口吻、

移れば替る世の中の
無量の思ひ胸にみち
目と目を見合す計なり
堺山松の夕嵐
非情の色もなにとなく
戎服の袖を濡らしそうらん

新年小學生徒に寄す　安藤新太郎

隙行く駒の足早く
既に過さり盡き果てゝ
明治十歳も八餘り
悦び迎ふ新玉の

春風四方に吹き渡り
雲は間近く降り來て
軒に聳ゆる日の丸の
國の榮えを壽きぬ
或ハ鞠に或ハ羽子
實に治まれる御代の春
光り輝やく其の本ハ
朝夕こゝろ勵まして
花さへ葉さへ咲き茂り
智慧てふ玉を研げバこそ
學びの道を怠らで

爲學生者須朝讀暮誦焉可矣

空に靉靆びく紫の
飾り立てたる門松や
御旗をこめて目出度も
童子乙女ハ餘念なく
思ひ〳〵の手遊びハ
斯もいみじく日の本の
教への庭に吾れ人の
播きにし種の育ち來て
今日より明日と日に益して
童子乙女よ起居にも
通へよ學びの園許へ

いまのおみらハ石瓦
教へ導く師の言葉
何つか光りも增す鏡
ゆめ怠りぞもの學び
幼なき時に學バぞハ
今日其玉を研かずバ
學べよ學べ道學べ

光りも出でぬ玉なれど
守りて心盡しなバ
世に崇められ愛られん
ゆめ忘れぞな玉研き
老て必らず悔あらん
明日ハ光りの失せやらん
研けよ研け玉研け

碌々庵居士曰、通篇總妙、又曰、通篇皆誠、何等老巧手、

テニソン氏輕騎隊進擊の詩

一里半なり一里半

、山仙士

並びて進む一里半

死地に乗り入る六百騎
士卒たる身の身を以て
答をなすも分ならず
死ぬるの外ハあらざらん

右を望めバ大筒ぞ
共に打出す砲聲ハ
響の如く凄まじや
猛り立てぞ進むなる
勇んで乗り入る六百騎

將ハ掛れの令下す
譯を糾すハ分ならず
これ命これに從ひて
死地に乗り入る六百騎

前も左りも又筒ぞ
天に轟くいがつちの
彈丸雨飛の間にも
死地にこそ入れ鰐の口

抜けバ玉ちるやいばをバ
さら〳〵と輝けり
大砲方をなで切りす
烟の中に飛込みて
太刀の早業見ごとなり
遂にさゝふる事ならず
馬の頭ぞ立直す
殘るハいとゞわづかなり

右を望めバ大筒ぞ
共に打出す砲聲ハ
皆もろ共に振あげて
敵陣近く乗り掛けて
最と目冷しき働きぞ
烈しく陣を破るなり
敵の軍勢たぢ〳〵と
むら〳〵ぱっとむらくづれ
以前に進みし六百騎

左りも後も又筒ぞ
天に轟くいかづちぞ

彈丸雨飛の其中に
死地より出でゝ乘り歸す
歸るゝ元の一里半
殘るゝいとゞわづかなり

あゝ勇ましきものゝふの
手柄ゝ永く傳へなん
とる年あまた重りて
頭に霜を戴きて
六百人の豪傑が
そのふる事を語りなば

百二十

縱横むじん切り靡け
鰐の口より脫れ出で
六百人の其中で

よに香しき其譽
今のをさなで生立て
腰ゝ梓の弓となり
孫ひこやしやで多き時
敵の陣へと乘り入れる
末代までも名ゝ朽ちじ

詠史

武士の礎としもたゞへつゞ
やまと心のくもりなく
あかさか山にたてこもり
をろしの風にかたぎらば
散行にけりかの本の
又引かへし攻め來れば
心極めて櫻井の
子に教つゝのこしおき
うちしたがへて湊川
謀りし事もあわとなり

姓不詳

其名かれせぬ楠の木の
君につかへて國の爲め
あるは千早に吹をろす
たまりもあいずちりぐと
いやつきしにうちよせて
今をかぎりに死なばやと
里にかはれる言の葉を
其身はやがてつゝものを
そこをふかみて赤心に
消て戰の敗れるも

百廿一

豫てかくぞと空に滿つ
花と散てし憐れさを
暫時まどろむ夢をさへ
心をつぎて君がため
家に傳へしみたからの
いるてふ事を記し置き
實にたぐひなき丈夫の
國を枕になしてける
傳へ聞くだに身もさむく
碌々庵居士曰、筆々櫻芳、非レ有レ得ニ於文一者、豈論得ニ
深切如ニ此乎、

百廿二

倭心ハ三吉野の
早くも仇の傳へ聞き
驚かなんとむらきもの
盡す心ハたゆみなく
梓の弓のなきかずに
吉野の山のかはれるも
親子はらからのこらぞも
赤き心を今も世に
なりにけるかな哀れ丈夫

日本魂

日本魂其ハ何ぞ
外國人の傳りを
是ぞ日本の心なる

日本魂其ハ何ぞ
棲む人迚も諸共に
是れぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
如何なることの有る迚も

尙今居士

寄せ來る敵を打拂へ
夢にも受ることハ無し
是ぞ日本の心なる

筑紫の端や陸奥に
偏へに盡す國の爲め
是れぞ日本の心なる

割れは亡び合へハ立つ
心合して割れざるは

百廿三

是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
力の有ん限りにハ
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
國に無學の跡を絶へ
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ

是ぞ日本の心なる

人々勉め怠らず
國を開きて利を興す
是ぞ日本の心なる

學びの道を盛りにし
智識を以て名を揚る
是ぞ日本の心なる

尊き人も卑人も
家の富めるも貧しきも
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
道ある者と交るに
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
信を盡す其の爲に
是ぞ日本の心なる

相親しみて僻なし
是ぞ日本の心なる

外國人を侮らぬ
彼と是との隔てなし
是ぞ日本の心なる

忠義心を堅く取り
身をば棄てゝも動かじな
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
正しき道の刃よて
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
慈悲の心を擴ろめ
是ぞ日本の心なる

百廿六

弱を扶て強を擊ち
無理非道を亡ぼさむ
是ぞ日本の心なる

幸なき者を憐みて
禽獸にまで及ぼさむ
是ぞ日本の心なる

碌々庵居士曰、世人往々論二日本魂一莫レ不レ偏而如二此篇一議論適切、筆力亦老蒼、非二才學兼備者一不能矣、

百合香女史

秋の夕

憂き世の塵い隔ねと
昔の通ひ路世離れて
松吹く嵐竹の雨
天津乙女や搔き鳴す
軒端にかくるさゝかにの
雲居の月に照り添へて
草の根毎よ夜もすがら
千草の花をあやなして
萬有物を眺むれバ
斯く面白き秋の夜も
夜い憂き物と歎ちつゝ

一讀仙境に遊ぶが如し

こまも車も音づれぬ
柴の戸扉ぞ住よかる
友なき宿を慰めて
琴の調と聞ゆなり
糸に貫らぬく白露い
玉のすだれと見ゑにける
機織の虫の聲高し
明日い折りてん唐錦
造化の妙ぞ知られける
衣かたしき獨りぬる
慰め兼ぬる人もあり

方に是れ眞個の風流

百廿七

姑しはのめく稲妻の
思ひわびつゝ夕暗に

復古の歌

王政復古のそのかみを
三とせの冬の十二月
みやこの空にたちかへる
世はかりごもと亂れつゝ
鞍馬にひゞくときの聲
星のくらひも三臺の
あかつき暗き鳥羽伏見
錦の御旗ひるがへし

消へて跡なき世の中を
戀ひ渉るゞ憐なり

姓不詳

花もへば凄し慶應の
九日の日をはじめにて
春のひかりもぬばたまの
あやめもわかぬすみ染の
よろひの袖にかゞやくや
影うすれゆくさしぐしの
大内山のやまかせに
大將軍のいでましに

勇氣いやますすらをが
蠶きわたる修羅の道
ちしをに染るもみぢばの
仆れかさなるしかばねい
蹈しだきゆく戰場の
騎すつるぎのつかの間も
道のはてこそあいれなれ
炎さかまく淀の城
煙のすへのかげろふも
のどけき春にうちまとゐ
かたりつゝ酌むさかづきに

軍よはゐもいかづちと
斬りつ斬られつ阿毘叫喚
赤き心をとりぐに
敵か身方か彼い誰れ時
習ひ常なきつゆの身と
君をわすれぬものゝふの
天地もうごく震動に
おはへる雲のたちまちに
きえて治る君がよの
昔がたりとすぎし世を
老たるかげもかつ見ゆる

このうたげこそ樂けれ

凱戰の歌

柳櫻をこき交せし
吹き翻へる日章旗
欣び迎ふ國民の
歩兵騎兵の肅々と

勇む喇叭の聲々を
いさむ兵士にいさむ駒
旗も勇めい大筒も
勇み〳〵し兵士や

大庭景陽

都の春の朝風に
今日凱戰の我軍を
見渡すはるか彼方より
喇叭の聲の勇ましゝ

聞く國民は氣もいさむ
凱歌の聲も勇むなり
小筒とゞめに勇むなり
喇叭の聲も勇ましゝ

勇む兵士も戰場に
霰ふる日も雨の夜も
火玉飛び來るそが中も
爲と思へばいとゝなを

あなゆましの兵士や
修羅の巷よ出入し
銃と名譽を擔ひつゝ
柳櫻もうらゝかに

あらし辛苦い幾何ぞ
氷の刃鉄の
何よか厭わん大君の
喇叭の聲も勇ましゝ

國と君とのそが爲に
萬死の中に生を得て
歸る都の春景色
喇叭の聲の勇しゝ

碌々庵居士曰、起首胚胎全篇巧手可レ恐、

讀めやよめ〳〵此文を
我日の本に
生れ來し民
たる者ゝ肝
銘して居ら
にやならぬ
ぞ諸人よ讀
めやよめく
此文を

軍歌

來れや來れいざ來れ
寄せ來る敵は多くとも
死すとも退くこと勿れ

進めや進めいざ進め
劍は林を爲すとても
死すとも退くこと勿れ

姓不群

御國を守れや諸共に
恐るゝ勿れ恐るゝな
御國の爲なり君のため

彈ゝ霰と飛び來るも
ためらふことなく進みゆけ
御國のためなり君のため

勇めや勇め皆勇め
御國を守る兵士は
死すとも退くことなかれ

勉めよ勉め皆共に
汚せしものぞと後の世に
死すとも退くことなかれ

懷へよ懷へ能く懷へ
我身の失せざる其中ゝ
死すとも退くこと勿れ

劍も彈もなんのその
身は鉄よりも猶堅し
御國のためなり君のため

汚せしことのなき國の名を
言れぬようにと覺悟して
御國の爲なり君のため

神より受けたる此國ゝ
人手ゝ決して渡さずと
御國の爲なり君のため

守れや守れ皆守れ
恐るゝものゝ父母の
死すとも退くとなかれ

恐るゝ勿れ恐るゝな
國をゞ愛する兵ものに
死すとも退くと勿れ

進めや進め皆進め
命を惜まず進み行け

異國の奴隷と成ることを
墳墓の國をゞ能く守れ
御國の爲なり君のため

民をゞ愛する我君と
勝つべきものは世に非ず
御國の爲なり君のため

腐りし心のなきものは
御國の旗を押立て

死すとも退くと勿れ

進めや進め皆進め
進めや進め皆進め
死すとも退くと勿れ

御國の爲なり君のため
御國の旗を押立て
祖先の國を守りつゝ
御國の爲なり君のため

鎌倉の大佛に詣でゝ感あり　尙今居士

今をさることかぞふれゞ
六百年の其むかし
建長のころ鎌倉よ
稻多野局が建られし
總青銅の大佛ゝ
御身のたけゝ五丈にて
相好いとゞ圓滿し
見者無厭の尊容は
何れの地にも比類なし
さるに明應四年とや

由井のつなみの難により
紫磨金仙も雨に濡れ
殆ど此に四百年

余もこのごろ鎌倉の
杖をひきつゝ大佛に
しかと尊顔見上れば
淨き如來の御心は
涅槃てふ語の思ハれて
しばしの間胸の雲
眞如の月の圓かなる

百卅六

大殿破壞の其後ハ
風に暴されたまふこと
こハこれ人に聞くところ

古跡尋ねてをちこちに
詣でゝ心おちつけて
はちすの花もおよびなき
外に見ハれ何となく
凡夫不覺の余とても
霧れて無明の夢ハ醒め
影を見たるにあらねども

見たるが如き心地せり

言外に深意あり

夫れ物事のなりたちに
昔し羅馬の帝國い
起りしものにあらずして
家康ひとり德ありて
時勢人情やうやくに
鎌倉山の大佛も
千百年を過ぎし後
鑄ものゝ術も具りて

頓にとゝのふことぞなき
シーザルひとり智を奮ひ
德川氏の繁昌ハ
成りしものとな思ひぞよ
運びて此に至りてさ
浮屠氏の教へ渡り來て
人の信仰厚くなり
初めてなりしものならん

百卅七

稲多野夫人の時代にハ
精神こめて手を合せ
わが後世をも祈りしも
生れし人ハ然ハせず
昔の事を思ひやり
業をほむるの外ハなし
秋の空にも劣るまし

昔の人の是といひし
今日の眞ハあすの僞
非理邪道となるならん

百卅八

此大佛に打向ひ
天下太平安穩と
今の明治の聖代に
佛の面を打眺め
其鑄工の巧みなる
かわれがかハる時勢かな

事も今でハ非とぞなる
あすの教ハあさっての
天地萬物一定の
規律ゑ由りて進化すと
聢と心に認めたる

嗚呼盛んなる大佛よ
からくれなゐのもみぢ葉と
人の譽むるに異ならず
如何に時勢の變るとも
歎賞せざることなけん

學者ハ謂へど是を之れ
人ハ果してなかるらん

六百年もたった川
流るゝ水を年々に
尊體此處ゑ在ます間ハ
年々人の尋ね來て

百卅九

無題

碌々庵居士曰、昔人之與二今人一、雖二詣則詣一矣、觀レ物之情豈得レ無レ異乎

故久阪義助

世ハ刈菰と乱れつゝ
蟬の小河に霧立て
うら痛ましや靈しき
實美朝臣季知卿
其の外錦小路どの
旅にしあれば駒さへも
降りしく雨の絶間なく
都ゆしもわきて蘆がちる
ゆめの浮世ハ物かはと
峯の秋風身にしみて
妙法院の鐘の音も

讀む者をして坐ろに懷舊の感を起さしむ

眞に鬼神を泣かしむるに足る

百四十

紅さす日もいと暗く
隔ての雲となりにける
大裡に朝暮殿ゐせし
壬生澤四條東久世
今浮草の定めなき
進み兼つゝ嘶きつ
涙に袖の濡れ果てゝ
難波の浦にからきたし
ゆかむとすれば東山
朝な夕なに聞なれし
何と今宵ハ憐れなる

いつしか暗き雲霧を
みやこの月や見給はん

世渡りの歌

宜も出來たり實りたり
わけて今年の秋穫を
又とあらじな國本も
爰にかゝると聞からに
すき返しても長き日の
それのみならず霖雨や
夜の目もねぞに引板の番
野分の風の無慙やな

農況殆んど嘆に堪る

拂ひ盡してもゝしさの

小川健次郎

往來の人も稻のなみ
見れば農はどよき業ハ
こゝに基ゐし民命も
鋤をうりて鋤をかひ
腕も肘もぬけそうに
旱に水のかけ引や
さるに一日野も山も
泣くにもなけず取分て

百四十一

世の常なさを嘶つより
嗚呼六づかしの世渡や

物うる業ハむかしこそ
國のひかりも身の幸も
非じとさけば矢も楯も
輸出輸入の平均や
取もどさんと健氣なる
あへなく外れ幔幕の
賣れば借られ買へば損
きへて果散なく雲霞

商家の内幕を説破する才筆

賤しといへど今の世ハ
もとむる道もこの外に
はや溜らじと投げ捨て
彼れに得られし商權を
胸算用の正鵠ハ
設け處か埒もなく
杖と賴みし資本も子も
あらしの庭の花紅葉

外に詮術なかりける

世の常なさを嘶つより
嗚呼六づかしの世渡や

棹一本に浮々と
遊びがてらに渡らるゝ
危險を怯ぢぬ畏れずに
日頃の伎倆顯はすハ
よるべき蔓を求めねば
共に根ハなきうき草の
誘ふ人なき身の不運
月に嘯き花に醉

舟子も亦憐むべし

此處の泊りや彼所の浦
舟子も暴風の危險あり
名譽の海に乘り出し
いと易けれど夫とても
よし覓むとも其蔓も
憂き難難をよそに見て
はり裂く胸を押鎭め
流る水を友として

外に詮術なかりけり

世の常なきを嘆つより
嗚呼六つかしの世渡や
世わたる業い多けれど
つきて廻はる諺の
おなじ羽色の蝶鳥い
其生活い習ふより
傍目をふらずひたすらに
又あすよりと工夫して
其熟練の遺傳とに
はげみ進めばおのづから
彼れに利あれば此に害
畔を走るも田をとぶも
れろかな事よ細虫すら
なれし手業を怠らぞ
明日い今日より明後日い
祖先の立てし計畫と
光りを加へ漸くに
我をしらぞに一日より

外に詮術なかりけり

ひとひと樂に傍目より
嗚呼いとやすの世渡や

羨むこえを聞く時い

碌々庵居士曰、窮通否泰之理、親切周到、說破得其肯綮、所謂有レ益于名教一者、至三行文之自在與二字句之温雅一是此編之餘事焉耳、

碌々庵居士

隱子を詠じて學童に寄す

草蘆の前の谷川の
清き流れい潺々と
ひゞく音色い三味線か
琴か胡弓かひるも夜も
斷間あらせぞ人のみか
草木も奥に乘じけり

後に聳ゆる嶮山の
舞ふやら歌を謡ふやら
舞子が山と稱ふるも

左に繁る竹藪や
囀づるとりの聲きけば
浮世の塵を避て今

名譽利益ハ何のその
睡もさめぬ其のうちに
百花爛熳馥郁と

古き大夫ハおどるやら
其趣きハ天然の
蓋し故障ハなかるべし

右に盛れる森の内に
彼れといひ又此れと云ひ
別乾坤の住なり

春のあしたの朝寐して
はや啼き起す鶯や
きそひ慰む樂しさよ

さぞや都の人々ハ
此處の濶る碌陰や
席をうつして身を休め

柴の扉になく鹿の
花に勝りし紅葉見や
杖に信しておちこちに

殘るくまなく銀世界
眺めも清きさよらかな

猛烈しき熱に堪へざらん
彼所の涼しき壑底に
午睡するさへ意の如し

聲も哀れとなりぬれば
ひるをあざむく月みんと
逍遙するも忙ハし

かれ木も六ツの花盛り
けしきといへど賞賛られぬ

見よ今人と同じと

嗚呼童子よ此文ハ
時勢に暗き頑愚なる
春夏秋冬一ト日だも

況て雪見の諷言ハ
價あるぞや童子よ
春夏秋冬一ト日だも

寒村夜歸

草木も眠る丑三ツを
讀て自ら凄然
遠寺の鐘の音凄く

我を襲へる九折
洩來る月の片われハ

聲より外に友もなし
住めば都の關がしさ

同感々々

權貴の門にへつらひて
まけぬ重荷を負ひ擔き

小笹を渡る夜嵐の
登るも暗き杉村を
何地なりけん梟の

斯る淋しき土地なれど
車の塵もかゝらねば

名利に追ひ牛馬に
我と我身に使はるゝ

百四十八

うはべばかりが銀世界

いと大切なしるたぞよ
支那の古風の隱子さへ
怠るひまハあらざるぞ

吾等にとりて千金の
支那の古風の隱子さへ
怠るひまハあらざるぞ

小川健次郎

なれし道とて只ひとり

苦痛ハしらで春の花
秋ハ鹿の音月雪と

我もの顔にもてあそぶ
自らゆるし友も亦

是れ眞の快樂なるか

貴人も知らぬ快樂の
謳へば返す谷の山彦

社會學の原理に題す

宇宙の事ハ彼是の
規律のなきハあらぬかし

夏ハ螢や郭公
四時おり〳〵の景物を

身は昭代の棄材ぞと
瓢一ツに王公や

多き此身を神に謝し

山仙士

別を論せず諸共に
天に懸ける日月や

微かに見ゆる星とても
いへる力のある故ぞ
又定まれる法ありて
且つ天体の歴廻れる
必ず定りあるものぞ
地震の如く乱暴に
一に定まれる法ハあり
地をハふ虫や四足や
其組織より動作まで
又萬物ハ皆共に
あらざる物ハなきぞかし

動くハ共ゑ引力と
其の引力の働きハ
猥りにひけるものならず
行道とても同しこと
又雨風や雷や
外面ハ見ゆるものとても
野山に生ふる草木や
空翔りゆく鳥類も
都て規律のあるものぞ
深き由來と變遷の
鳥けだものや草木の

別を論せぞ諸共に
遺傳の法で子に傳へ
適せぬものゝ衰へて
桔梗かるかや女郎花
牡丹に緣の唐獅子や
木の間囀づる鶯や
雲居に名のる杜鵑
友を慕ひて奥山に
譯も分らで貝の音に
羊に近き猿はまだ
靈とも云へる人とても

親に備ゝる性質ゝ
適するものゝ榮えゆき
今の世界に在るものゝ
梅や櫻や萩牡丹
葉の葉に止まる蝶〳〵や
門邊にあざる知更鳥や
同じ友をゞ呼子鳥
紅葉ふみわけ啼く鹿や
追ゝれてあゆむ牛羊
愚なことに禽獸の
今の体も脳力も

元を質せゞ一樣に
積みかさなれる結果ぞと
見極ゝめたるゝこれぞこれ
優すも劣らぬ脳力の

これに劣らぬスペンセル
化醇の法で進むのゝ
動物而已にあらずして
活物死物夫而已か
區別も更になかりしを
感ずるも尙あまりあり
思慮智識の發達も

一代增しに少しづゝ
今古無双の濶眼で
アリストートル、ニウトンに
ダルウヰン氏の發明ぞ
同じ道理を擴張し
まのあたりみる草木や
凡そありとしあるものゝ
有形無形夫〴〵の
眞理極めし其智識
されゞ心の働も
言語宗旨の改良も

社會の事も皆都て
既にものせる哲學の
生物學の原理やら
土臺となして今更に
書にものさるゝ最中ぞ
そも社會とい何ものぞ
其結構に作用に
種族と親と其子等の
男女の中の交際や
取扱の異同やら
違ひの起る源因や

同じ理合のものなれば
原理の論ぞ之に次ぐ
心理の學の原理をも
社會の學の原理をば
此書に載せて說かるゝに
其發達い如何なるぞ
社會の種類如何なるや
利害の異同如何なるや
女子に子供の有樣や
種々な政府の違ひやら
僧侶社會のある故や

其變遷の源因や
智識美術や道德の
遷り變りて醇する
論述なして三卷の
最とも目出度美擧にこそ
讀たる者い誰ありて
實に珍らしき良書なり
何から何とせいをやく
走り書やらからしやべり
天下の事い一と飲みと
新聞記者や演說家

儀式工業國言葉
時と場所との異同にて
其有樣を詳細に
長き文にぞせらるべき
既に出でたる一卷を
此書を褒めぬ者ぞなき
社會の事に手を出して
責任重き役人や
舌もまいらぬくせにして
法螺吹き立てゝ利口ぶる
此書を讀みて思慮なさば

人をあやまる罪とがの
月日の事や星の事
夫等の事ハさて置さて
疊一枚させバとて
長の年月年季入れ
出事る事にハあらざるに
年季も入らぬ學問も
新聞記者や役人と
か樣な者ゞ多けれバ
尙ほ恐ろしき虛無党の
揉めに揉めたる其上句

百五十六

少しハ減りもするならん
動植物や金屬や
凡そ天下の事業は
足袋を一足縫へバとて
寐る眼もねずに習ハねバ
獨り社會の事バかり
するに及バぬ譯なれバ
成るハ最と〳〵易けれど
忽ち國に社會党
起るハ鏡に見る如し
蚍蜉取らぬその丸漬れ

秩序も建たず自由なく
再び浪風靜まりて
百年足らぬ掛らんハ
有樣みても知れたこと
忘りに手出しする勿れ
廣き世界の其中に
盲目同士の戰に
覘ひさまらぬ棒打の
今の世界ハ旋風
烈しき中へつい一寸
足も据ハらぬ瞑眩さ

泥海にこそなるべけれ
大平海となる迄は
革命以後の佛蘭西の
そこに心が付きたらバ
忘にしやべること勿れ
恐るべきもの多けれバ
越したるものハあらぬかし
仲間入りこそあやうけれ
烈しく旋る時なるぞ
絡き込まれたら運の盡
頭ハいとゞぐらつきて

百五十七

くるくると廻りされて
上句のりてり空中へ
初て悟る其時り
後悔先きに立ぬなり
其吹く中へ過ちて
上手とこそり云ふべけれ
輿論を誘ふ人だちり
能く慎みて輕卒に

碌々庵居士曰、意至筆至論復至、可レ謂二三絶一、又曰
舉二社會學之大綱一盡矣、又曰、末段
諷諫適切、使讀者改容、

百五十八

すき間もあらぞ廻されて
絡きあげられて落されて
早遲蒔の粳椒
颶風烈しく吹く時り
船を入れぬが楫取の
政府の楫を取る者や
社會學をバ勉強し
働かぬやう願りしや

春色見るが如し

春の眺め

春の景色を見渡せバ
吹く春風の暖かさ
鳴く鳥の音の長閑さよ
袖を拂ひて人に媚び
我を招くの風情あり
最とゞ操を增す鏡み
人も興にや浮かれけん
或り菜の葉に戯れつ
見れバ眼を喜ばし
西に東に耳に聞き

子有樵夫

四方の野山の雪融て
咲く花の香の芳しさ
梅り笑を含みつゝ
柳り風に靡きつゝ
松り常盤の色變へて
雲雀も蝶も黄鳥も
木の間青空囀づりつ
野邊に藜の杖曳きつ
聞けバ耳根を樂まし
北に南に目に觸るゝ

初音も緑も黄金なる
心を慰めざるゝなし
愛つべきものゝ多けれど
眺めゝ飽で忘られん
詩にも歌にも巧みなる
得こそ寫さじ此狀ゝ
唯り占むべきものならず
何つ何れにて見らるべき

送二學一友ノ歸一鄕ヲ一歌

五年六年諸ともに
互に勵みはげましつ
染出して妙

百六十

錦の色も皆な共に
夏秋冬の眺めにも
別けて東風吹く春の日の
如何に書に畫に又文に
風流才子なれバとて
左ゝ言へ春ゝ天地のみ
我身の春の來るときゝ
早く見まほし聞まほし

大竹美馬

同じ學びの窓の内に
慰められつなぐさめつ
光りのどけき春の日や
五月雨晴れぬ夏の日も
いとゞ樂しく過しさり

月日の流れ早くして
昨日もろとも住みなれし
明日ゝ旅路に出船の
かしまたち今祝ふなり
いざやはせ〳〵其酒を

歌へや舞へや皆共に

月かげ清き秋の夜や
雪ふりしきる冬の夜も
いとゞうれしく暮しけり

五年六年とく立ちて
學びの舍を出たりし
ともなり師なる君達の
祝の酒をすゝむなり
いざやくめ〳〵此酒を

舞へや歌へや諸共に

今日を限りぞ明日よりハ
敵といふハ忌言葉
難きも難き事ならぬ
聲をバ雲井に上るなる

さハいへ心有明の
行衛思へバうたてやな
天と地との間をバ
隔てハあらじ西東

同じ圍居の友人よ

又逢ふ事の易さやハ
雲をも排く心あらば
月の前ゆくほとゝぎす
あれ見よ高く上るなる

月影かくす村雲の
浮世の事に似たる哉
家となしつゝ過る身ハ
北も南もみな同じ

雲になやめる月を見よ

朝顔ニ寄テ學童ヲ勵ス圖

浮世の事い何事も
さりとて心れくらすな
斯くして後に思ふ事
風ふき拂ふ雲間より

思ふまゝにはならぬ共
耐へよ忍べよ怠るな
かなふ者とや見よや人
月い出たり顯いれたり

嗚呼面白の景色やな
明日の別れのいとつらさ
取れや人々酌む酒の
深き契りを忘るなよ

そゞろうき立つ思哉
愁を掃ふ玉はゝき
つきぬためしも有磯海の
寐ねずにあれや今宵一ト夜
月もろともにやすらはで
歌へや舞へや明るまで

可想々々

祿々庵居士曰、毎一句押一韻、巧一穩ニシテ而秀一潤、能ク發ニ揮ス

朝貌の花に寄せて學童を奬勵す

小川健次郎

庭のかきねの朝貌よ
咲ぎも盡ぬ其花の
同じ天地の惠みにて
深き心の白露の
人こそ花に劣るらん
負けず起出で機嫌能
我身の無事を神に謝し
椽や襖の拭きいらひ
やがて汝の實も花も
朝なゝにれこたらず
色といひ又形まで
我等の目をば慰さむる
千をも知らで寐くたるゝ
學びの兒よこのいなに
貌打洗ひ父母と
庭の面のいささうじ
怠らぬやうつとめよや
此朝顏にもまさるべし

此邊の數句數讀以て肝銘すべし

庭のかきねの朝貌の
咲たる花の其色に
異なる原因や其外に
心理の法や白露の
人こそ人の甲斐なけれ
疑ふならば躊躇せぞ
精神論や物理學
化醇の律をあきらめて
幾春秋の年月を
今を蕾の汝の身
朝なゝに咲理由や
白といひ又赤青と
我等の目をば慰さむる
結ぶ作用をしらで過ぐ
學びの兒よ此問を
普通の學を疾く課へて
夫から夫と研究し
學士哲士と呼ばれたら
樂しき中に送るべし
露の散る間も怠らず

勸ゝ勸に改む如何

勸めて徒に過ぎるなよ
蕾に似たる學の兒

四時

一管の筆頭能く百日の春寫す感即々

出でよ人々春の野に
菜種のゝなも盛なり
浮れ遊ばぬものもなし
摘め〳〵菫をとめ子等

口頭此句を吟すれゝ全軀既に十分の涼を覺ふ

涼みに出でよ河原まで
月おもしろく照すなり
皷打つにや河の水

百六十六

花によく似た蕾の兒

大和田建樹

れんげの花も盛りなり
うたふ黄鳥舞ふ蝴蝶
抜け〳〵茅牙うなゐ子等
あらおもしろの野遊びや

風ふく地よく通ふなり
琴を彈くにや岡の松
暮ゝ涙に流れけり

其寂寥を寫さゞして却て其盛觀を擧ぐ亦是れ一種脱俗の新案

散れ〳〵夜露我袖に

行けや友達秋の野ゝ
桔梗かるかや女郎花
人待顔に靡くなり
吹きな乱しぞ夕嵐

ふれ〳〵小雪ふれ小雪
垣根の竹も撓むまで
翁や子ども花翁せ
銀の世界に成りにけり

月をうつして翁さまし

今こそ盛り花盛り
蔡もすゝきもたよ〳〵と
踏みな荒しぞ草莊等
明日も來て見ん此花を

向ふの松も隱るまで
拾へや子ども玉拾へ
あらをもしろの雪景色
なほ降れ小雪あすまでも

百六十七

刺客を詠ぜる詞

天を仰げバいと廣し
その中に住む人にして
狹き心のひとすぢに
ゆゝしき事や起らんと
やがて病にかこつけて
時い花散る春風の
それと言はねど父母よ
厚き恵も報ひ得ず
うからはらから友がきよ
おもひ煩ひかき殘す

百六十八

八門　奇者

地見みわたすも亦廣し
なぜか心の狹かりし
この人あらバ世の爲に
思ひわびけん朝夕に
勉めしわざも打棄て
なぜやの里に歸り來て
是ぞ此の世のおわかれよ
先だつ罪は免してよ
告げんとすれどつげゞてに
心は盡さぜとる筆に

今日春雨のふる里を
頃も經ぜして稲葉山
識る人とていながら川
尋ね問ふべきよしもゞな
憎さもにくしかのかたき
下なる民をそゝのかし
上を崇むる人をしも
下にへつらひ民にこび
薩摩の瀬戸に幾千々の
うてたくはあれど君がため
國のみいづを振はんと

もはやたち出る旅ごろも
ふもとよ着きぬ嬉しくも
おもふかたきにあふ瀬をバ
とく揮まはしこの白刀
非ぬ望みを胸にをき
上の掟を言あバき
誘ふものと誘れども
ねぢけいでたる彼等ども
人を沈めし涙風も
高麗もろこしも討鎮め
思ふ餘りの其の結局

百六十九

憎むべしとも覺ゆれど
是れに引かへ彼のともは
彼の蠢けき佛蘭西の
首斬り臺に國王を
いと淺ましくふるまへる
口をひらけば鮮血もて
かゝる勢ひつのりなば
いで大君の御爲に
左はさりながら彼の人の
つき從へるにせものゝ
とまもかくにも彼の人の

百七十

思ひかへせば可惜ひと
世の正道を亂さんと
血の波たちし禍津世の
ひきすへたりし此時の
あとに心やとまりぬる
世を洗はんと叫ぶなる
危からまじ大君は
斬り斃してん彼の人ゝ
誠にかくも思へるか
妄にしかはいふなるが
心のうちを知らんとの

願ひかなへてまのあたり
心の中ゝいかなりし
かくし持ちたる七首を
待つとゝさらに彼の人は
鼻高らかにしづ〳〵と
何故ありてかくすると
問ふは愚よ汝こそ
閃く刃はぢばしる
此のますらをの眞心の
よしやうらみゝ遺るとも
ふみにしるして音高く

ゑんせつきゝし其時の
今ゝ少しもゆるされじ
袖の裏にて拔き放じ
神ならぬ身の思はねば
歸る跡より飛びつけば
言はせも果てぞ何故と
今將來の國賊と
血しほも赤き心なる
貫かざるぞ怨みなる
なはきろの名は世の人も
語りつぎなん千世までも

百七十一

されど敵と見ひがめし
すくなきまでにあつかりき
國につくせるこゝろざし

其の紳士は世にためし
君に忠なる志し

この一篇ハ是れぞこれ。ヘンリー四世のありさまを。寫せし歌の引として。、山仙士が手にかゝる。名作なるぞ。名文ぞ。輕々看過するなかれ。

シェーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段

ヘンリー四世そのハじめ
一旦謀反くわだてゝ
リチヤルド王と戰ひて
自ら立ちて王となり
天ハいかでか亂臣を
禍亂交も起り立ち
ウエールス人ハ蜂起せり

ランカストルのヂウクたり
六萬人の將として
王を俘になしたれバ
四方に逆威を震ひしも
安穩にてハ置くべきや
戰爭止むとき更になく
スコット人ハ攻め入れり

ペルセイ一家叛逆す
其數いとも多かりき
王に烈しく抵抗す
王ハ人望失ひて
其翌年に至りてハ
心で心責められて
なすことならぬ苦しさよ
そのありさまを寫したる
廣き世界のその中に
ヘンリー四世ならざるハ

王を暗殺するもの
議院ハ權理打ち守り
財政いとも困難し
健康漸く衰へて
自ら悔ゆる其惡事
安眠とてハ片時も
此一篇ハこれぞこれ
シェーキスピールの名作ぞ
王者の數ハ多けれど
幾人ありや聞かまはし

、山仙士

最と下賤なる我人の
今しも眠る其數ハ
あゝ羨しうらやまし
天より我に賜はりて
如何なる罪の祟にや
たとへ暫時の間なり共
瞼を閉ぢて眠らんと
そも如何なれバ眠神
くすぼりかへる藁の床
心地もよげに横たはり
とびくる虫の羽音さへ

枕を高く高いびき
幾千萬かあるならん
眠の神よねむり神
伽するとこそ云ふべけれ
眠の神に見ハなされ
胸の苦しさ忘れたき
如何にすれども眠られず
見る影もなきあバら家の
むさ苦しきも厭ハぢに
枕のほとりぶん〳〵と
眠りを誘ふ助にて

すや〳〵眠るものなるに
床の上なる天蓋は
眠を誘ふ樂の音ハ
貴人高位の寐屋までは
實に愚なる神ぞかし
不潔な床に横たはる
王者の床に來らぬぞ
比べものにハあらぬのを
ゆら〳〵ゆるゝ帆柱の
水夫の目をば閉ぢさして
吹き來る嵐凄まじく

伽羅沈香を炷き立てゝ
金襴緞子以て作り
最と心地よく聞ゆなる
何とて來ることのなき
何故にかく見苦しき
下賤な者と寐ハずるも
金の時計と鐘と
はていぶかしき神の意ぞ
高き上にも安く寐る
情け用捨も荒涙や
うづまく涙をまき上げて

天地とゞろく涙音は
下ハ無間の地獄なる
涙にゆらめき眠らする
総身水にひたされて
斯く騒しき其折も
尊末も眠る丑満に
手を替へ品を替ゆるとも
依怙贔屓なる神にこそ
寝ろや眠れや羨し
冠着たる頭程

シェークスピール氏ハムレット中の一段

死人も覺むる程なるに
高き柱の其上で
神の力ぞ不思儀なる
身を粉に砕く水夫には
眠の神ハつきそふに
眠を誘ふ其工風
王者の傍に來らぬハ
あゝ幸多き賤の身ハ
つら〳〵思ひ合ハすれバ
苦しきものハ世にあらじ

ながらふべきか但し又
愛が思案のしどころぞ
これに憑ふるが大丈夫か
深き遺恨に手向ふて
どふも心に落ちかぬる
眠ると同じ眠る間ハ
あらゆるうきめ打捨つる
アゝしぬ 睡るねむる時
ハアこたわりが有るようぢや
無常の風にさそハれて

尚今居士

ながらふべきに非るか
運命いかにつたなきも
又さハあらで海よりも
之を晴らすがものゝふか
扨も死なんか死ぬるのは
心痛のみか肉体の
是ぞ望のハてならん
萬が一夢みるならバ
な世と曰ふに死に眠り
此娑婆離れしまふとも

いかなる夢の來るや
うき事長く忍ぶのも
九寸五分さへもちたれば
事をすやすやすけれど
强者の非道世のそしり
想ふ美人の不深切
貴人の無禮又たとひ
輕しめらるゝ是をこれ
重荷を負ひて汗流し
暮せぬ暮し暮すのも
死後の恐れがあるからぢや

百七十八

ハテ疑の晴れぬのも
これが爲めかや何故なれば
その切先でひとつきに
之をば爲さず慎みて
驕れる人のいづかしめ
緩みすぎたる國の法
いかに善しとも下人の
堪へ忍ぶのゝ何故ぞ
ういめつらいめこらへつゝ
亦何故ぞ是いみな
死出の山路の不思議なる

登りて歸る人ぞなき
物すごくこゝろ思いるれ
うきかんなんを嘗るとも
斯くと心に思ふ故
いかなる深き大望も
實のなるとぞなかりける
アヽたをやかな其風情
わしが罪障わびてたべ

如何なる事のあるやらん
たとひ此世に止まりて
あの世の事ゝ恐しや
たけき心も弱くなり
花を開かぬ枯れ失せて
左ゝさりなからオヒリヤよ
そなたゝ神をいのるなら

起筆敬服々々

ホーヘンリデンの戰爭の詩　山陰樵夫

日ゝ早や西に入相の
鐘ゝかすかに聞へつゝ
イーザー河の音高く

百七十九

流るゝ水ハ物凄く
新に積る雪のとこ

只聞くものは村遠く
夜ハいと爛けて見ゆる頃
すは事ありと大將ハ
暗きを照す明りをバ

喇叭の聲や火把の
整頓したる騎馬武者ハ
手荒き馬ハ恐しく

百八十

凡て新手の兵は
餘愈もなくぞ臥し居けり

犬の長吠する聲ぞ
不意に打ち出す大鼓の音
墨なす空の冬の夜の
付けよ〳〵と命じけり

明によりて速かに
玉ちる劍拔き連れつ
身の毛もよだつ響應に

預らんとや勇み立ち

名譽に充てる軍馬をバ
音は怡ら雷の
震ひ崩れつ鳥羽玉の
千々の電ぴか〳〵と

いとも雄々しく嘶けり

敵の陣屋へ乘り入るゝ
轟く如く山岡も
暗夜に閃めく大炮は
まばゆき迄に光りけり

秋の紅葉のそれならで
ホーヘンリンデン岡の上に
瀧つ瀬をなすィーザーの
殺伐悲愴の有樣は

唐紅にまだらなす
輝る電ハいや赤く
流るゝ音ハいや高く
いと凄じく見へにける

百八十一

漸やく明る朝ぼらけ
鯨波を作りて突き進む
眞一文字に天ぎらふ
さし輝る旭兵ハ

燦たる軍旗なびかせつ
勇み乘り入る輕騎隊
古今無双の軍功を
両軍既に入り雜り

森を離るゝ雀色
猛烈敢死の兩軍を
八重棚雲を押し分ける
榮譽をこそハ表しけり

撃てよ進めの命令に
屍を塚にうづめんか
建てゝ名譽を博せんか
酬とこそ見られけり

名も世に高き佛軍か
男子と生れし甲斐もなし
流る血汐に此恥を
憤り激せる兵ハ

さしもにつよき墺軍も
如何で望を達すべき
降り積む雪ハ兵の
踏轟なす芝泥は

不意を撃れし遺憾
いざ諸共に身を屠して
潔く雪いで呉れんぞと
勝利の程ぞ預知けり

死を定めたる負傷者
却て敵に逆撃たれ
身の廻り纏ふ衣ぞや
長く睡らん墓場なり

碌々庵居士曰、最末之二句、結得妙甚、

櫻の歌

大庭景陽

我國まもる武士の
朝日よにはふ山櫻
左近の花に風吹かゞ
樂とり直して守るべし
其色其香たゞなるも
花散る事はなきぞかし
聖帝の大御代と
櫻花こそ愛たけれ
夜る行宮にしのび入り
赤き心を墨染の
世にも稀なる忠烈は

諸々筆々

絵りく

特得妙甚

大和心を人問はゞ
咲くや霞も九重の
守れや〳〵武士よ
櫻は忠義の花なるぞ
浮薄の風にさそわれて
千春万春動かざる
共に世界に例しなき
昔し兒島の三郎は
十字の詩をも作りなし
花と其香を競ひける
鬼神とても泣かんめり

去れゞ今尚武士が
三郎如き忠臣を
帝に仇する者あるか
忠義の劍ふりかざし
國平らげく安らけく
廣き世界に輝かし
千萬春を迎ゑんと
我武士の忠烈は
櫻と共に例なし

花見るたびに古の
羨みしたひ慷慨し
國に敵する者あらば
只一打にさり倒し
聖帝の御威德を
櫻の花ともろともに
やたけ心のいや勝る
櫻と共に例なし

句々筆々、忠香櫻芳、

落花居士

敢て童子を
言へぬして
一般の人と
云ふ是れ歸
納の論辨か

此世に生る人々は
生れ得たるの天質は
勉めよへげめ我童子

貧しき家に生るとも
富き人の子たりとも
勉めよへげめ我童子

汝が常に羨やめる
帶ぶてふ人へ年や經る
勉めよへげめ我童子

貴賤貧富の別あるも
磨けば晴るゝ玉の雲
よく守りてよ師の教へ

學び次第で富みやする
學び次第で奥やしまる
よく守りてよ師の教

胸に輝く勳章を
苦辛ぞしけん讀み書を
よく守りてよ師の教

櫻ノ宮ノ圖

道玄坂

道玄坂

玉の樓臺に住居して
殖生の小屋に屈りて
勉めよゝげめ我童子

譽を得んも名を擧も
心根痩せて苟も
勉めよゝげめ我童子

世に君子とも大人と
盤をあつめ月の窓

錦をまとひ常日頃
繼樓をきるのも唯心
よく守りてよ師の教

幹ありてこそ開く花
美し結果を望もかな
よく守りてよ師の教

仰ぐる人ゝ古今とも
其苦ゝ知れぞ數ふとも

渋谷道玄坂 玄誠堂

勉めよゝげめ我童子

全篇を収結し得て妙

斯の如くに呉々も
言葉を盡し勸むるも
勉めよゝげめ我童子

小楠公決死の歌

正平四年正行は
四條の隆資卿を經て
先臣正成勤王の
打滅して先帝の
その後天下又乱れ

百八十八

よく守りてよ師の教

くり返しつゝ理を極め
國の爲なり汝の爲め
よく守りてよ師の教

橋本謙作

芳野の皇居に參内し
心の中をぞ奏しける奏しける
軍を起し朝敵を
叡慮を安め參らせし
逆臣尊氏筑紫より

都をさして攻上り
終に津の國兵庫なる
戰死をこそゝ遂げたりき
其時正行漸やくに
軍の場へは伴はで
敵を亡し我君の
遺し訓へし言の葉ゝ
然るに正行今は早や
今に及びて朝敵を
いつをか待ん人の身ゝ
病の爲に死しもせゞ

正成覺悟や定めけん
湊河にていさぎよく

十一歳になりぬるを
河内へ送り歸しつゝ
御代になせよと細々に
今尚耳に留まれり留まれり
年も壯となりければ
打亡さで過しなゞ
思ふに任せぬ習にて
君の爲にゝ不忠なり

百八十九

渋谷道玄坂 玄誠堂

父の爲にハ不孝なり
されバ此度師直と
彼が頭を正行が
頭を彼に取らるゝか
雌雄を定め申すべし
今度の軍正行が
今生にては今一度
申しも敢ぬ涙をば
義心氣色に見あたりき
天子御簾をバ掲げさせ
此程數度の戰ひに

何ぞ勇壯なるや

手痛き軍を仕り
手に打取　か正行が
二つの中に戰ひの
必死の覺悟に候へバ
龍顔拜ませ玉はんと
鎧の袖に注ぎつゝ
近く召れて正行よ
敵の勇氣を摧しは

叡慮を慰するに足ぞかし
父子累代の勳功ハ
朕は汝を股肱とす
王家の重きに任せんと
正行首を地に着けて
思ひ定めて退ぞきぬ
斯くて一族郎黨と
參りて御暇を申上げ
各らの名字を書き連ね
兼て思へば梓弓
記し留むと鏃もて

深く感ずる所なり
必ず命を全ふし
畏き詔とありければ
是を最后の參内と
後醍醐帝の御陵へ
如意輪堂の壁板に
又其奥に歸らじと
なき人數に入名をバ
一首の歌を書き殘し

芳野を出て勇ましく
碌々庵居士曰、全篇巧手可レ愛、就レ中中段最妙、讀
至二其段一不レ逆レ涙者夫禽乎將獸乎、

新案いろは歌

今ハ昔と異なりて
恥ぢも譽れも學問を
程に報ひの影なるぞ
迚も身の浮く瀬いあらじ
利害の程を明らめよ
類を離れて學バざバ
我身からなる錆を衣て

百九十二

四條の綱手に向ひける向ひける

一山居士

祿も位も智慧次第
日夜に勵み怠るの
平生遊び暮しなバ
千々に思ひを廻らして
攝んでられぬ其中に
老て悔ふとも詮あらじ
唐に和に古くより

渋谷道玄坂 玄誠堂

妙甚

世に捨てられし人々の
練磨を忘るゝとなかれ
培かふとの無かりせバ
名ハ末代の身の紀念み
胸に置く手の裏表
井に住む蛙ハ白糸の
多くハ變り進行く
闇みも月夜の電氣燈
蓋し古人の見聞きせバ
此開らけ行く世を知らで
手を袖にして只管らに

例しハ數多あるぞかし
園の梢も花も實も
根葉諸共に枯れぬらん
樂も苦も皆な其元ハ
有爲轉變の世の樣を
望みも細き淵も瀬と
陸に蒸滊車海に船
待つ間程なき電信機
不思議と言ふの外あらじ
益なきことにのみ泥ぢみ
遊び暮らせる人々の

百九十三

澤なるとこそ悲しけれ
行末憂ふる輩らへ
見もし言ひもし學びもし
エビシデさへも習ふ世ぞ
揉めよ揉まれよ内外との
進めよ人々覺よ皆な

護國の歌

汝等朕の肱股ぞと
義ハ山岳も啻ならず
護れや守れ軍人

來れよ來れ同胞らの
盲も啞も今ハ皆な
加之ならず稚兒の
臀屈の眠り疾く覺まし
世故人情に文に武に

姓不詳

最とも惶さみことのり
死は鴻毛と覺悟して
皇國を護れ諸共に

我を育てし父母の
父母に孝ある者ならば
護れや守れ軍人

國の大事に死するのは
水火の中も何のその
護れや守れ軍人

寄せ來る敵ハ多くとも
旭のみハた押したてゝ
護れや守れ軍人

墳墓の國とハ此國ぞ
死して忠義の鬼となれ
皇國を護れ諸共に

兼て覺悟の前なるぞ
忠義と名譽を盾にして
皇國を護れ諸共に

當る鋒さ强くとも
一歩も後に退かず
皇國を護れ諸共に

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

二千五百有余年
汚せし者ぞと後の世に
護れや守れ軍人

丸は霰ととびくるも
大和魂あるもの丶
護れや守れ軍人

劍も我身にたちはせじ
皇國を護る兵もの丶
護れや守れ軍人

汚れしとなき國の名を
笑れぬ樣覺悟して
皇國を護れ諸共に

劍は林をなすとても
恐る丶とはあるべきぞ
皇國を護れ諸共に

丸も我身はとをしあじ
身い鉄よりも尙堅し
皇國を護れ諸共に

以下穩にして巧

昔よりして今までも
國を愛する兵ものに
護れや守れ軍人

文明開化の春風に
我敷島の山櫻
護れや守れ軍人

昇る旭と國の名を
千代も八千代も萬代も

民を愛する大君と
かつべき者ゝ世にあらじ
皇國を護れ諸共に

今を盛りと咲き匂ふ
異國の嵐に散さじと
皇國を護れ諸共に

地球の上に輝かし
香しき名を殘さんと

渋谷道玄坂 玄誠堂

護れや守れ軍人

題　秋（西詩和譯）

早やさしにけり秋の影
そよ吹く風に飜へり
苔のあからみいと深き
賤の小家の靜けさ
浮世の塵をよそに見る
時つく遠き鐘の聲
夏の緑も消へはてゝ
谷の水際に咲き殘る
色いとさめて哀れなり
秋の景色となるにつれ
谷間を越えて諸共に
黄昏時になるまでも
今われ愛に唯ひとり
移り傾く日の影に
戯ぶげに見ゆるなり

皇國を護れ諸共に

望月秋太郎

庭の木の葉へちりぐと
草屋を囲む垣の面の
千ひらの金に勝るなり
此かくれ家に聞ゆるへ
山々深し秋のいろ
小草の華の紫も
時へ來にけり去年迄へ
登り遊びしあの山に
待てども更に聲へせで
健く幼なき面さしの

渋谷道玄坂 玄誠堂

流麗悠暢

移りさへ行く夕日影
西の山端のくれなひの
黄昏暗くなるまでも

碌々庵居士曰、句々愁殺、含二無量ノ感懷一

湘南秋信

昨日けふと思ひしも
旅にいなれぬ苦しさよ
雲の通路斷えぬとも
あすは來にけん友便り
偶にはあれど其さへも
有るものとてい無りけり

起首人の意表に出づ

二百

獨り行む戸のそとに
色もいつしか消うせて

鈴木劣太郎

早一月の旅衣
眺むるものい空の雲
斷えゝなるい文の面
あさては又親や妹
要事のけては何もかも
まいて王子の紅葉だも

いかに見物か其とても
泣になかれぞ兎や角と
知るや知らずや秋の霜
哀れを見舞ふ氣合なり
あるい馬入に馬を倍
大和心のやる瀬なき
都の人にしられんも
今年のみのり豐けさよ
來るや春の事までも
君が代なれや有がたし
田舍の住居にし然かも

想ひやるのみ詮すべも
案じ暮すい愚かゝも
千草にかゝる照月も
木の葉の落る音づれも
また　雨降に雨に嵐
思案なげ首池の鳧
外にいあらじ是いそも
民の命のかゝる紐
嬉しく思ひ云まくも
白きを語る丹の肝
露の惠みの深さにも

二百一

渋谷道玄坂 玄誠堂

酔ひて管まく其代り
晴民評曰、句精巧、押韻自在、敬々服々、

案山子

玉や錦のよそおひを
いとゞあわれにやれ笠と
うきかん難も嵐また
ものともせずに殺々として
風を自然に備ふるゝ

そも〳〵更にふかしぎの

東京の摸様知らせたも

碌々庵居士

飾らぬのみか見るさへも
敗れ簑なる出立にて
露雨霜にうたるゝを
他物の奪ふべからざる
蓋し君子の風情なり

輕視されざるその原因を

弓を彎しゝ眞の勇
その又世俗を避たよに
得たりし顔の容貌ゝ

其仁智勇を一身に
夏の耕すそれのみか
守り〳〵て晝ゝ鳥
秋のみのりゝ穰々と
穰々稻のなみうつゝ

見れゞ今年の秋獲も

ひいてうたぬゝ仁者なり
田野に立て唯ひとり
畑を樂しむ智者ぞかし

たもちて春のたねまきや
總て田づくる農業を
夜ゝけものをおひのけて
往來の人も稻のなみ
是皆案山子の仁惠なり

いや事ずみとなりぬれば

渋谷道玄坂 玄誠堂

其功績と仁惠なる
弊や路傍に打棄てゝ
刑に處すやら擲壊と
世のならわしと云ひながら

嗚呼案山よかこちすな
斯る非道のあつかひを
汝ぢひとりにあらざるぞ
人にうとまれ讒せられ
或ゝ地下に逍遙す

事を忘れて溝又ゝ
或ゝ擢て炮烙の
なして腐らし朽させる
あわれ無慰の仕業かな

そちに告へきとぞある
うけて撓けず撓まぬゝ
古來有爲の人だちが
或ゝ配所の月に醉ひ
其數かぞへ盡されぬ

左ゝ去なから諸人よ
此世の事ゝ何も角も
とゝ云へ心まめやかに
勤めて後に思ふ事
のどけき春となりぬれば

可惜とびちる花を見よ
思ひのまゝにならざるぞ
耐へよ忍べよ怠らぞ
仕遂げ得らるぞ見よや人
花の香清く咲ぞかし

春の花

春の景色を見渡せば
花なき里ぞなかりける
色香愛たき其花も
憂き事のみぞ多かりき
雪降る夜にゝ枝を折り

龍溪學人

野の末山の端までも
今を盛りに咲き揃ふ
過ぎ越し方を尋ぬれば
霜降る朝にゝ葉を隕し
枯れしとまでに眺められ

渋谷道玄坂 玄誠堂

集り會ふ憂さことの
耐へて忍びし甲斐ありて
斯く咲き出るぞ愛たけれ
其の身の上に喜の
知りなゞ何か憾むべき
春の花こそ愛たけれ
碌々庵居士曰、句々珠玉、筆々寫眞、敬服々々、

熊本籠城の歌　大庭景陽

西も東もみな敵ぞ
寄せ來る敵ゝ不知火の
世にも名高き猛ら夫の

積り〳〵し其中を
のどけき春に巡りあひ
世の爲にとて誓てし
花のつぼみゝ憂き事と
春の花こそ例なれ

南も北もみな敵ぞ
筑紫のはての薩摩方
たけり狂ふて攻め來り

西九州に名も高き
敵の總督隆盛は
之に從ふ大將は
中にも逸見十郎太
其外兵士二三萬
進み打出す砲聲に
天地は崩れ山河は
動かぬものは君が御代
忠義の旗をふうかざし
唯一筋に國のため
過ぎし普佛の戰に

熊本城を囲みけり
古今無双の豪傑で
桐野篠原村田など
慄悍決死の烈丈夫
何れをとらぬ薩摩武士
天地も崩るゝばかりなり
裂るためしのあらばとて
城の中なる官軍は
死を視る歸する如くにて
進みすゝんで防戰す
薩士の城の降りしは

長く青史を汚したり
千早の城の楠公か
谷少將を始とし
家をも身をも打忘れ
此時都の方よりは
多くの官軍出陣す
空飛ぶ鳥のそれならで
城中城外もろともに
折柄たけき若者が
單身劍を提さげて
蟻のはい出る空もなき

それにつあらで城中は
睢陽城の張巡か
下も兵卒に至るまで
一心不乱に防戰す
錦の御旗ひるがへし
されども城の連絡は
翼なければ通ひ得ぬ
音信する由なかりけり
國の爲めとて健氣にも
城を出でつゝ夜に乘じ
賊囲の中を潜り出で

都の軍に身を投じ
語りつ問ひつ示しあい
爰に始めて連絡の
池中の魚も時を得て
進め〳〵の号令に
西北南東なる
空前絶後の功を立て
我日の本のますらをゝ
譽め羨まぬ者ぞなき

此邊數句何等の快筆何等の老筆恐るべし恐るべし
紙上亦号令の激揚なるを聞く

夏夜卽事

城の中なる有樣を
賊兵原を打破り
解けて嬉しき厚氷
跳る心の活潑地
萬銃天地に鳴り響き
囲の賊をうち攘ひ
名を揚げ父母を顯せし
譽め羨まぬ者ぞなき

小川健次郎

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

壹の暑さはゆふ立に
かゝかく月に置わたす
玉を欺く玉だれの
いとも涼しさむち竹の
疑ふばかりおと細く
千ひらの金と一刻を
猶明け易き夏の夜の
口さがなくも愚かにも
蚤蚊や蠅と打つけに
おもひを焦す螢火や
しのぶ軒端の橘に

あらひ流して峯高く
千草の雪のはら〳〵と
小簾の返えに吹ちりて
葉越に秋や來ぬるかと
庭の筧もきこゆなり
惜みし春の宵よりも
價を誰かさだむべき
夏いうるさし又暑し
貶していふはいゝずして
昔の人の袖の香を
はつねをもらす郭公

渋谷
道玄坂
玄誠堂

熊本籠城ノ圖

渋谷道玄坂 玄誠堂

訪ふ人もなき草の戸を
物の哀れをゆめにだに
静かに觀れば四ツの時
われを慰め樂します
今目のあたり覺えたる
つゝむとすれど夏衣

縱筆自如何
等意氣何等
風神

見二燭蛾一有レ感

時しも夏のやみの夜に
東の窓の其もとに
涼しき風を送り越し
いと美しき蝶々の
叩く水鷄にやぶらるゝ
しらで寐過す人ならん
うつり變りて物ごとに
深き方便をゆくりなく
其嬉しさと樂しさよ
吹返したる峯の松風

犬山居士

文書かんとて我庵の
燈ともせば庭の木の
衣を通し吹くにつれ
飜めき來り燈みて

取らまくぞする有様を
深く心に藏め置き
抑も難を企だつゝ
又其本を見ざりせバ
等しき業やなすならん
取まくするは愚ならぞや
なさまくするゝ愚なり
其身失せては遂げたし
しめて其身の燒もせず
進みて後にはまれ得て
名譽の人と呼バゝれん

金言々々
結ひ得て妙

見れば悟の有そ海
守らんとする事ぞある
惡きとにはあらねども
今しも來りし蝶々の
燒ても思ふ其火をバ
死しても難き其事を
其身ありてぞ事遂ぐる
されバ撓まぬ心をバ
死しもなさぬ道をとり
後に鑑を殘すべき
名譽の人と呼バゝれん

渋谷道玄坂 玄誠堂

禄々庵居士曰、叮嚀訓誡之意、句々莫レ不レ顯、使人不レ覺切齒、

ロングフェルロー氏人生の詩　、山仙士

そも靈魂の眠るのゝ
人の一生夢なりと
眠らにや夢ゝ見ぬものぞ
夢と思へどさにあらぞ

死ぬといふべきものぞかし
哀なふしでうたふなよ
此世の事ゝ何事ぞ

人の一生夢ならず
人の終は墓なくも
土より來り又土に

最とたしかなる事ぞかし
墓にうづまるものならず
歸ると云ふゝ肉体ぞ

そりや靈魂の事ならず
此世に在りて樂むも
世にある趣意よあらざらん
日毎〳〵に怠たらず
功を立ねばならぬぞよ

光陰實に箭の如く
心い如何に猛く共
送葬大鼓打つ胸い
最とも哀にひゞくらん

又苦しむも固と人の
生るい役に立つ爲ぞ
今日い今日だけ一日の

藝道いとも易からぞ
墓なく進む葬禮の
音止めされたる大鼓の音

此世の中い戰爭ぞ
人に生れた甲斐もなく
あゆむ羊や牛たるな
功名手柄なすべきぞ

如何よ樂しくおもふ共
如何にうれしくありつ共
働くべきい現在ぞ
胸の心と天の神

其戰爭の中に居て
人に使われ追われつゝ
人に劣らぞ憤發し

未來いあてにすべからず
過去いむかしに過ぎし事
其の働を見る者い

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

豪傑輩の一生を
生きて甲斐なきものならず
稀なる譽得るならば
永く傳へて殘るらん

二百十六

つら〳〵思ひめぐらせば
人に勝れし手柄して
名ハ香しく後の世に

其香しき名を聞かバ
艱苦辛苦を浪風よ
助け船さへあらぬ身の
功名遂ぐる者あらん

社會の海に乗り出して
吹き廻ハされて破船して
氣を取り直し憎發し
されバ人々怠たるな

暫時も猶豫するなかれ

運命如何についたなきぞ
たゆまず止まず自若として
勤め働くことをせよ

心を落すことなかれ
功名手柄なしつゝも

碌々庵居士曰、讀去不レ覺擲レ卷、罵レ吾笑レ吾者、三四而不レ止、又曰、毎段説二破人情一其巧、天然恐非二人造一也乎

日本刀の歌

氷か雪かはた霜か
光りも寒く又凄く
實にも貴き日本刀

大庭景陽

水より清く潔よく
凛然萬古に輝きし
世界に類ひなかりけり

二百十七

渋谷道玄坂 玄誠堂

百練千磨の功を經て
忠魂義膽は鉄壁の
動かぬ君が大御代と

拔けばさらめく青蛇の尾
霜雪飛す心地よさ
日本刀の切れ味ぢゝ

我國勇氣の存亡は
此の寶刀のなかりせば
實にぞ貴さ日本刀

きたい出せる丈夫の
城より堅き賴母しさ
世界に類ひなかりけり

揮ひ來れゞ烈日に
姦臣賊子を打倒す
世界に類ひなかりけり

此の寶刀に因るぞかし
大和魂ひ地に墜ちむ
世界に類ひなかりけり

碌々庵居士曰、日本刀之鋭利尊嚴、與二本篇之餘玉裝錦一、麿辭不レ可二以評一、

人の東都に之くを送る　　楢山居士

木梢を鳴らす秋風に
壯士を送る易水の
國と民との爲めなれゞ
墳墓の土地を跡に見て
土地を故郷となしつゝも
尺取虫の暫し間ゝ
風雨あらき折あらゞ
自由權利を保護しつゝ

一たび去て還らざる
昔も今も變らざる
身をも命も顧みぞ
都といへど住馴ぬ
螢の机雪の窓
時を松ケ枝歳寒の
國と民との傘となり
假令太夫の封得ぬも

渋谷道玄坂 玄誠堂

常盤の色の變らざる
利祿の霜に凋むなよ
行けよ行け〳〵疾く行きて
あづまの花を見る勿れ

天位天爵心懸け
云ふべきことゝ是のみぞ
あづまに花を咲せつゝ

碌々庵居士曰、字少意多、殆如讀大篇、又曰、宋之一句、重千鈞、

題明治乙酉攝河二洲洪水　一山居士

古來天變地異の爲め
兄弟妻子も離散して
口碑歴史にいと多く
其惨狀をまのあたり

蒼生塗炭の苦に沈み
老幼飢寒に死せしと
聞くさへ寒きに汗すなる
目擊しなば如何ぞや

起首能く冒頭其体に適す

況して自ら其害に
思ひやるさへ憐なり
明治十又八年の
洪水被害の事蹟なり
俄かに盆雨降り出でゝ
遂に其の十七日に
水嵩さ増すこと十五尺
一衝忽ち破潰して
龍憤虎怒も啻ならず
或ゝ田圃を洗ひさり
低地に到り留まりて

遺ひつる人ゝ如何ならん
茲に物する一吟ゝ
攝河二洲に跨がれる
月ゝ六月日ゝ十五
曠日瀰久晴れ遣らず
牧方地方淀川の
流れも急に堤防を
溢れし水ゝ箭の如く
見る間に近傍村落の
或ゝ家屋を破りつゝ
又去るべくもあらざれゝ

轉じ得て妙

實況々々

渋谷道玄坂 玄誠堂

斯くて〻果じと晝夜なく
破堤を修め溜水の
二十九日の事なりき
北風さへも添ひければ
忽ち波の荒ら立ちて
初めの浸地〻言ふも更
十に八九〻水底に
桑田變じて海となる
一圓全く沈み果て
影も形も水のそこ
恰も琵琶湖を見る如く

公私諸共勵精し
疎通を謀る其中に
又も車軸の雨降りて
過半竣へ　し其効も
再び堤を毀ち去り
四區十郡の町村〻
沒せられざる所なく
中にも茨田郡内〻
家屋森林皆共に
うへを漁船の走るなど
其のものすごき中に居て

以下慘狀可想

樹木や屋根によもすがら
蛙蛙と枝を爭ひつ
最早救ひの船や來ん
風に向へる燈火の
細き心を勵まして
親〻束に子〻西に
浮きつ沈みつ流れゆく
遠くなり又近くなる
泣けど叫べど片便り
知るに由なき九死中
底の藻屑となるもあり

露の命を繫ぎつゝ
風や止みなん水去らん
神や佛の助けんと
夫よりも最と危くも
夫と〻屋根に妻〻枝
夏尙は寒き水の面に
身〻浪花江の捨小舟
鳴海潟なる濱千鳥
遂に互ひに生死さへ
わづかに一生得るもあり
其慘其悲拙吟の

もとより盡すべきならぜ
就て無形の實を推せ
實に七百五十三
戸數ハ七萬二千强
其中死傷七十餘
一時救助を仰ぎたる
流れし橋ハ六十餘
其外社寺や學校や
流失破損尙は多く
この文明の乾坤を
是か將た非かと世の人の

たゞ左の形ちあることを
水に浸りし町村ハ
田園一万九千町
人口凡そ三十万
生死知れざる二三十
貧民七万餘人あり
破損ハ凡そ三十許
戸長役場や堤防の
近古稀れなる洪水の
斯く傷ふハ天道ハ
怪むも實に理りや

古代のノアを喚び起し
果して驚死せしならん
不意の天災なれバなり
金城内にありし儘
思ひ出せバ今も尙は
此慘狀を不知火の
又後の世の紀念にも
尾の長々と概畧を

此災厄に遭ハしめば
盡し其害輕けれど
居士ハ其頃涙花なる
坐がら實地を目擊し
肌に寒を覺ふなる
四方の人にも知らさるや
成さんものとて山鳥の
記憶の儘に賦すになん

末句隱而雅

碌々庵居士曰、句々活潑、恰如洪水之歷二一洲一、又如三瀾船之走二水上一、

新体詩歌選終

渋谷道玄坂 玄誠堂

明治二十年二月廿一日出版御届
仝　二十年四月　出版
仝　廿一年十二月四日印刷
仝　廿一年十二月五日再版

編輯者　大坂東區島町二丁目拾番地寄留　佐藤雄治
發行者　大阪東區安土町二丁目廿七番地　津田市松
印刷者　大坂備後町四丁目八十一番屋敷　大庭和助

渋谷道玄坂　玄誠堂

渋谷
道玄坂
玄誠堂